



岐阜県教育文化財団文化財保護センター

調査報告書 第108集

の う ち い せ き  
野 内 遺 跡 D 地 区

2007

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター





卷頭図版 1



調査区全景（平成16年度）北から



調査区全景（平成17年度）北から



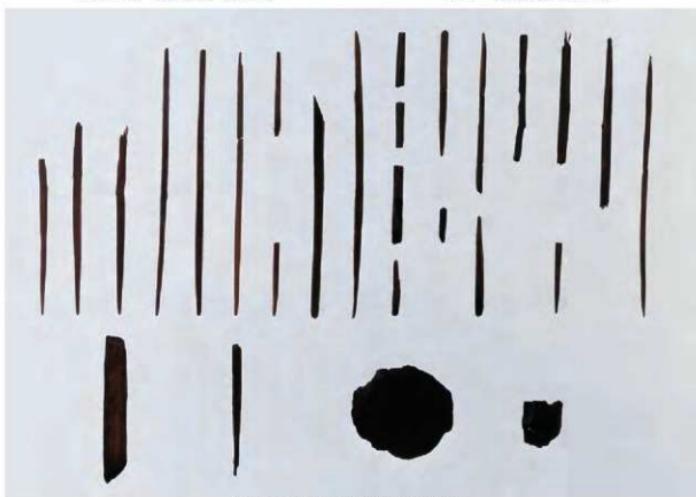
巻頭図版 2



SH 4・5 完掘状況（南から）



SB 1 完掘状況（南から）



SH 2・3 間連 柱穴内出土の木製品



## 序

岐阜県北部の飛騨地方は、東に乗鞍岳や御岳などの北アルプス、西に白山連峰を眺望できる美しい自然のなかにあります。冷涼な気候風土から育まれた豊富な樹木は古くから利用され、高山市内には優れた木工の代名詞とされる飛騨の匠によって作り出された貴重な文化財が数多く存在します。伝統的建造物群や高山祭り屋台などが織りなす情緒豊かな町並みやそこに息づく雅やかな暮らしぶりは、飛騨高山の大きな魅力となっています。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道建設に伴い、高山市上切町に所在する野内遺跡の発掘調査を実施しました。野内遺跡は、高山盆地の北西の見量山から連なる丘陵の南側にある、縄文時代から中世にかけて長い時代にわたる複合遺跡です。本報告書は平成16・17年度に実施した「野内遺跡D地区」の発掘調査の成果をまとめたものです。

D地区は、野内遺跡の北西端に位置します。今回の調査では、弥生時代の堅穴住居跡、中世の四面庇を持つ掘立柱建物跡、柱穴列、水田跡、溝跡などを発見しました。また、縄文時代から室町時代にかけての多彩な出土遺物は、当時の人々の暮らしぶりを窺い知ることができる貴重な資料となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成19年12月

財團法人岐阜県教育文化財団  
文化財保護センター  
所長 田口 久之



## 例　言

- 1 本書は、岐阜県高山市上切町野内に所在する野内遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-09624）D 地区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、中部縦貫自動車道建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘調査は平成16・17年度に、整理作業は平成18年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第1章第2節2・第3章・第4章は近藤聰・澤村雄一郎が行い、それ以外の執筆と編集は三島誠が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、地形測量・空中写真測量などの業務は、株式会社ユニオンに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 自然科学分析（花粉化石群集測定、大型植物化石測定、プラント・オパール分析）は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）  
伊藤正人、牛丸岳彦、榎木幸司、長屋幸二、高山市教育委員会
- 10 本文中の方位は、国土座標第Ⅷ系の座標北を示している。当遺跡他地区の発掘調査との整合性を考慮し、日本測地系を使用した。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄2002『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが保管している。



## 目 次

序	
例言	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序	11
第2節 遺構・遺物の概要	13
第3節 第1調査面の遺構と遺物	25
第4節 第2調査面の遺構と遺物	45
第5節 遺物包含層の遺物	62
第4章 自然科学分析	
第1節 自然科学分析の概要	96
第2節 花粉化石群集の検討	97
第3節 プラント・オパール分析	103
第4節 大型植物化石の検討	106
第5章 総括	109
参考文献	116
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 道跡位置図	1	第38図 S H 4 造構図	49
第2図 野内道路A-D地区の配置	2	第39図 S H 4 関連造構図(1)	50
第3図 試掘確認調査設定図	3	第40図 S H 4 関連造構図(2)	51
第4図 調査区・グリッド設定図	4	第41図 S H 5 造構図	52
第5図 周辺の地形と道跡の立地	7	第42図 S H 5 関連造構図(1)	53
第6図 周辺の地質概略図	7	第43図 S H 5 関連造構図(2)	54
第7図 野内道路周辺の道跡	9	第44図 堀立柱立建物跡(S H 6・7)	56
第8図 明治時代の土地利用図	10	第45図 S B 1 の遺物出土状況図	58
第9図 基本層序	12	第46図 S H 4・5 の遺物出土状況図	59
第10図 造構断面形状分類図	14	第47図 第2調査面の造構出土遺物(1)	60
第11図 第1調査面造構配置図	15	第48図 第2調査面の造構出土遺物(2)	61
第12図 第2調査面造構配置図	16	第49図 遺物包含層の遺物出土状況図(1)	63
第13図 着状木製品長幅比	19	第50図 遺物包含層の遺物出土状況図(2)	64
第14図 燃えさし長幅比	20	第51図 遺物包含層の遺物出土状況図(3)	65
第15図 杭長幅比	20	第52図 遺物包含層の遺物出土状況図(4)	66
第16図 板状・棒状木製品幅厚比	20	第53図 遺物包含層の遺物出土状況図(5)	67
第17図 石礫長幅分布図	21	第54図 遺物包含層の遺物出土状況図(6)	68
第18図 スクレイバー長幅分布図	22	第55図 遺物包含層出土の遺物(1)	71
第19図 楔形石器長幅分布図	22	第56図 遺物包含層出土の遺物(2)	72
第20図 R F・U F長幅分布図	22	第57図 遺物包含層出土の遺物(3)	73
第21図 刃片長幅分布図	22	第58図 遺物包含層出土の遺物(4)	74
第22図 S H 1 造構図	27	第59図 遺物包含層出土の遺物(5)	75
第23図 S H 2・3 造構図	28	第60図 遺物包含層出土の遺物(6)	76
第24図 S H 2 関連造構図(1)	29	第61図 花粉化石群集及び	
第25図 S H 2 関連造構図(2)	30	プラント・オバール採取地点	96
第26図 S H 3 関連造構図	31	第62図 地点①の花粉化石分布図	102
第27図 S A 1~3 造構図	32	第63図 地点②の花粉化石分布図	102
第28図 S A 1~3 関連造構図	33	第64図 地点④の花粉化石分布図	102
第29図 木田造構・足跡造構・溝跡造構図	36	第65図 プラント・オバール分布図	105
第30図 溝跡関連造構図	37	第66図 第1・2調査面主要造構配置図	110
第31図 杭列の分布状況図	39	第67図 各造構の主軸方位	112
第32図 S H 2・3 の遺物出土状況図	41	第68図 第1調査面調査区全体図	118
第33図 S D の遺物出土状況図	42	第69図 第1調査面分割図1	119
第34図 第1調査面の造構出土遺物(1)	43	第70図 第1調査面分割図2	120
第35図 第1調査面の造構出土遺物(2)	44	第71図 第1調査面分割図3	121
第36図 S B 1 造構図	46	第72図 第1調査面分割図4	122
第37図 S B 1 関連造構図	47	第73図 第1調査面分割図5	123
		第74図 第1調査面分割図6	124
		第75図 第1調査面分割図7	125

## 表目次

第76図 第1調査面分割図8	126
第77図 第1調査面分割図9	127
第78図 第1調査面分割図10	128
第79図 第1調査面分割図11	129
第80図 第1調査面分割図12	130
第81図 第1調査面分割図13	131
第82図 第1調査面分割図14	132
第83図 第1調査面分割図15	133
第84図 第1調査面分割図16	134
第85図 第1調査面分割図17	135
第86図 第1調査面分割図18	136
第87図 第1調査面分割図19	137
第88図 第2調査面調査区全体図	138
第89図 第2調査面分割図1	139
第90図 第2調査面分割図2	140
第91図 第2調査面分割図3	141
第92図 第2調査面分割図4	142
第93図 第2調査面分割図5	143
第94図 第2調査面分割図6	144
第95図 第2調査面分割図7	145
第96図 第2調査面分割図8	146
第97図 第2調査面分割図9	147
第98図 第2調査面分割図10	148
第99図 第2調査面分割図11	149
第100図 第2調査面分割図12	150
第101図 第2調査面分割図13	151
第102図 第2調査面分割図14	152
第103図 第2調査面分割図15	153
第104図 第2調査面分割図16	154
第105図 第2調査面分割図17	155
第106図 第2調査面分割図18	156
第107図 第2調査面分割図19	157
第108図 第2調査面分割図20	158
第1表 野内道路D地区内の試掘確認調査結果	3
第2表 周辺道路一覧表	8
第3表 検出した遺構数	13
第4表 遺物出土点数	17
第5表 土器・土製品分類表	17
第6表 山茶碗一覧表	18
第7表 木製品分類表	19
第8表 木製品出土一覧表	19
第9表 石器類器種別数量	21
第10表 水田造構計測表	35
第11表 遺構属性一覧表(1)	77
第12表 遺構属性一覧表(2)	78
第13表 遺構属性一覧表(3)	79
第14表 遺構属性一覧表(4)	80
第15表 遺構属性一覧表(5)	81
第16表 遺構属性一覧表(6)	82
第17表 遺構属性一覧表(7)	83
第18表 遺構属性一覧表(8)	84
第19表 遺構属性一覧表(9)	85
第20表 遺構出土遺物破片数一覧表(1)	86
第21表 遺構出土遺物破片数一覧表(2)	87
第22表 遺物包含層出土遺物破片数一覧表(1)	88
第23表 遺物包含層出土遺物破片数一覧表(2)	89
第24表 遺物包含層出土遺物破片数一覧表(3)	90
第25表 土器観察表(1)	91
第26表 土器観察表(2)	92
第27表 木製品観察表	93
第28表 杭観察表	93
第29表 石疋観察表	94
第30表 スクレイパー観察表	94
第31表 楕円石器観察表	94
第32表 R.F.観察表	94
第33表 M.F.観察表	94
第34表 打製石斧観察表	94
第35表 刃片観察表	95
第36表 碎片観察表	95
第37表 扉製石斧観察表	95



第38表 石皿観察表	95
第39表 磨石観察表	95
第40表 砥石観察表	95
第41表 金属製品観察表	95
第42表 銭貨観察表	95
第43表 花粉化石産出一覧表	101
第44表 試料1 g当たりの プラント・オパール個数	105
第45表 大型植物化石出土一覧表	108
第46表 挖立柱建物跡計測表	109
第47表 主軸別遺構内出土遺物一覧表	113
第48表 挖立柱建物跡の切り合い関係	114
写真図版目次	
卷頭図版	
卷頭図版1	
調査区全景（平成16年度）北から	
調査区全景（平成17年度）北から	
卷頭図版2	
S H 4・5 完掘状況（南から）	
S B 1 完掘状況（南から）	
S H 2・3間連 柱穴内出土の木製品	
図版1	159
調査区遠景（南から）	
北部調査区第1調査面全景（北から）	
図版2	160
北部調査区第2調査面全景（北から）	
南部調査区全景	
図版3	161
S H 1 完掘状況	
S H 2・3 完掘状況（南東から）	
779P 木製品出土状況（西から）	
768P 木製品出土状況（西から）	
771P 木製品出土状況（西から）	
724P 木製品出土状況（西から）	
796P 木製品出土状況（西から）	
781P 木製品出土状況（西から）	
図版4	162
水田跡（S T）完掘状況（南から）	
水田跡内で検出した足跡	
S A 1～3 完掘状況（東から）	
34 S D 遺物出土状況（北東から）	
35 S D 完掘状況（北東から）	
S S 3 検出状況（東から）	
S S 2 検出状況（東から）	
S S 1 検出状況（南から）	
図版5	163
S B 1 挖削状況（西から）	
S B 1 完掘状況（東から）	
S B 1 遺物検出状況（東から）	
S B 1 内 炉（705 S F）完掘状況（南から）	
S H 4・5 完掘状況	
190P 遺物出土状況（南東から）	
192P 繪出土状況（北から）	
205P 繪出土状況（北東から）	
図版6	164
第1調査面の遺構出土遺物	
図版7	165
第2調査面の遺構出土遺物	
図版8	166
遺物包含層出土遺物（1）	
図版9	167
遺物包含層出土遺物（2）	
図版10	168
遺物包含層出土遺物（3）	
図版11	169
遺物包含層出土遺物（4）	
図版12	170
産出した花粉化石	
図版13	171
野内遺跡D地区のプラント・オパール	
図版14	172
出土した大型植物化石	

## 第1章 調査の経緯

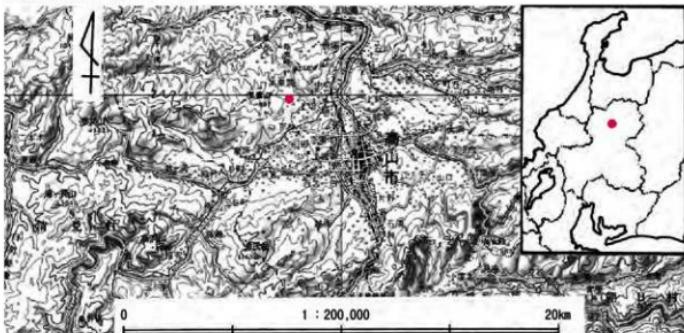
### 第1節 調査に至る経緯

野内遺跡D地区は、岐阜県高山市上切町に所在する。今回に発掘調査は、中部縦貫自動車道建設事業に伴い、実施したものである。

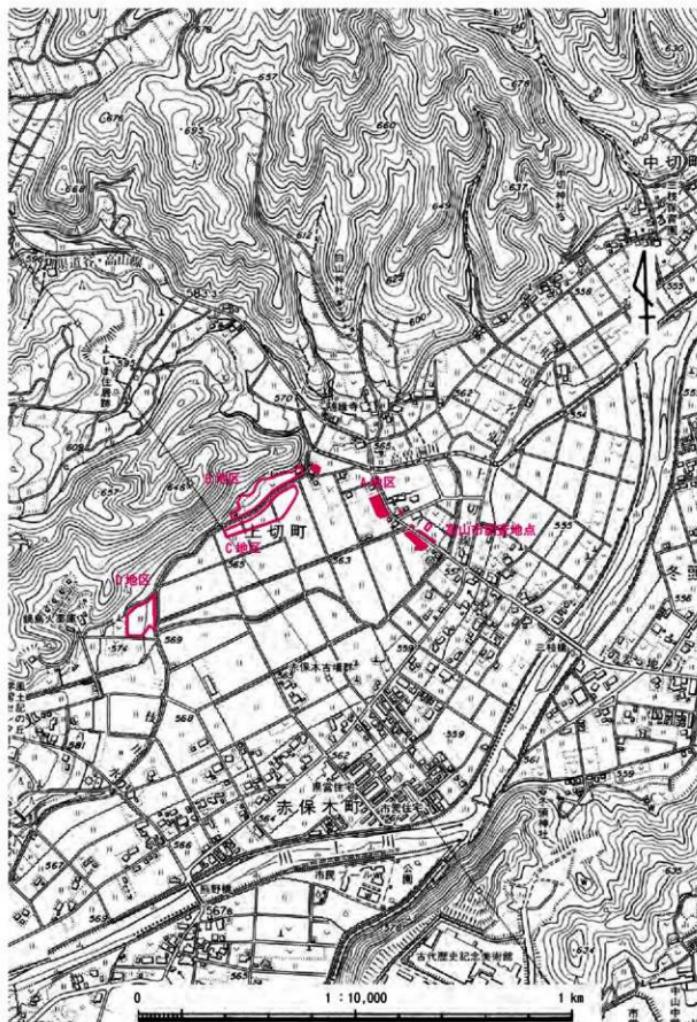
中部縦貫自動車道は、長野県松本市を起点に飛騨・奥美濃・越前地方の険しい山岳地帯を通り、福井県福井市に至る延長約160km（東海北陸自動車道重複区間を除く。）の自動車専用道路で、全線が開通すると、中央自動車道長野線・東海北陸自動車道・北陸自動車道をつないで、中部・北陸・関東圏を高速で結ぶ広域交通網が整備されることとなる。高山清見道路（全長24.7km）は、高山市周辺を通る自動車道で中部縦貫自動車道の一部を構成し、市街地の交通混雑の緩和、地場産業の振興、販路の拡大、観光リゾートとしての発展など、今後の地域の活性化に大きく関わっている。この高山清見道路建設に伴って、高山市に所在する上岩野遺跡、赤保木遺跡、三枝城跡、ウバガ平遺跡、与島B地点遺跡、与島C地点遺跡と野内遺跡が本発掘調査の対象となった。

野内遺跡は、平成11年度の事業予定地内の分布調査において、須恵器や灰釉陶器が表面採集され、新たに発見・登録された遺跡である。平成12・13年度に試掘確認調査が行われ、土坑・溝・ピット等の遺構や須恵器・土師器・灰釉陶器・木製品等の遺物が見つかった。この結果を踏まえて、岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会で本発掘調査が必要な範囲等が検討され、全体で23,900m<sup>2</sup>の本発掘調査を行うこととなった。遺跡は広範囲に及ぶため、A地区（3,000m<sup>2</sup>）、B地区（6,600m<sup>2</sup>）、C地区（9,000m<sup>2</sup>）、D地区（5,300m<sup>2</sup>）に分け、平成15年度から平成18年度まで本発掘調査を行った。このうち、A地区については、高山清見道路と交差する一般国道41号高山国府バイパスの建設に伴うものである。

本書で報告するのは、平成16・17年度に実施した野内遺跡D地区である。D地区的試掘確認調査は、平成12年度に当センターが実施し、3箇所の試掘坑（トレンチ）を設定して行った。その結果は、第1表、第3図の通りである。



第1図 遺跡位置図（国土地理院発行の50万分の1 地方図「中部近畿」）



第2図 野内遺跡 A～D 地区の配置

第3図 試掘確認調査設定位置図 ( $S=1/2,000$ )

第1表 野内遺跡D地区内試掘確認調査結果

トレンチ名	調査面積 (m <sup>2</sup> )	検出遺構	出土遺物
トレンチ7	37.0	ピット1基、木杭列1列	木製品、須恵器67点
トレンチ8	62.9	ピット2基	中世の輸入陶磁器、木製品等101点
トレンチ9	17.4		土師器片等15点

## 第2節 調査の方法と経過

### (1) 平成16年度の調査

平成16年度は調査区北側の2,800m<sup>2</sup>を調査した。

**調査区の設定** 調査区画は国土座標をもとに全体に10m×10mのグリッドを設定し、西から東へ35から42の数字を、北から南へホからヨのカタカナを付した。さらに磁北方位より各グリッドを1区画5m×5mに四分割(NW・NE・SW・SE)し、それらを組み合わせて各グリッド名とした。

**掘削作業** 表土を重機により除去した後、遺物包含層の掘削、遺構検出、遺構掘削を人力で行った。下層トレンチ確認調査はすべて人力で行った。

**実測等作業** 遺構の検出過程で、遺構の配置と切り合い関係を示す遺構全体配置図は、電子平板システムを用いて作成した。遺構の調査に当たっては、遺構名は通し番号に遺構の性格を想定した記号を組み合わせて表し、全遺構の平面図・土層断面図を作成した。原則として1/10、1/20の縮尺で手測り実測により図化・記録した。発掘調査区全体の平面図は、ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量によって作成した。また、同時に空中写真撮影を行った。

**遺物の取り上げ方法** 遺構から出土した遺物は、出土位置をトータルステーションで測定して取り上げた。遺構以外の出土遺物は、5m×5mグリッドごとに取り上げた。

## (2) 平成17年度の調査

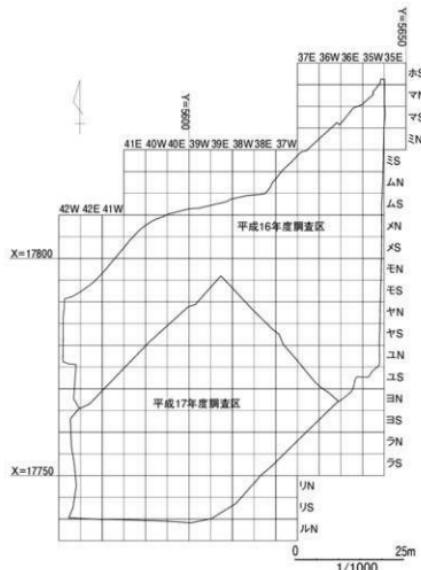
平成17年度は調査区の南側の2,500mを調査した。

**調査区の設定** グリッドは前年度の調査区に付加する形で、北から南へラからルのカタカナを新たに付し、東西方向に付した数字との組み合わせ、さらに方位よりグリッドを1区画5m×5mに四分割（NW・NE・SW・SE）し、それらを組み合わせて各グリッド名とした。

**掘削方法** 前年度と同じ。

**遺物の取り上げ方法** 前年度と同じ。

**実測等作業** 遺跡全体図及び遺構平面図は、デジタル測量により図化・記録した。一部の遺構平面図や断面図は1/10、1/20の縮尺で手測り実測により図化・記録した。発掘調査区全体の写真撮影は、ラジオコントロールヘリコプターにより行った。



第4図 調査区・グリッド設定図

### (3) 調査経過

現地での調査経過は次のとおりである。

平成16年度

第1週 (5/20~5/21) ~ 第2週 (5/24~5/28)

重機による表土掘削。崩落を防ぐため用水の補強。排水溝の掘削。24日より  
人力による遺物包含層掘削を開始。調査区外周の壁面清掃。

第3週 (5/31~6/4) ~ 第4週 (6/7~6/11)

調査区外周の壁面実測を開始。

第5週 (6/14~6/18) 15日に重機による表土掘削を終了。調査区外周の壁面  
実測、壁面写真撮影終了。調査区山側から第1調査面の遺構検出開始。

第6週 (6/21~6/25)

土の堆積を確認するためのトレッチ掘削。遺構検出開始。遺構配置全体図を作成開始。

第7週 (6/28~7/2)

溝跡やピット等、遺構掘削開始。

第8週 (7/5~7/9) ~ 第9週 (7/12~7/16)

遺構実測開始。

第10週 (7/19~7/23) ~ 第11週 (7/26~7/30)

畦畔を検出し、掘削開始。

第12週 (8/2~8/6)

6日に八賀晋指導調査員の指導を受ける。

第13週 (8/16~8/20) ~ 第14週 (8/23~8/27)

遺構検出終了。引き続き、遺構掘削、遺構実測、写真撮影。

第15週 (8/30~9/3)

遺構掘削終了。

第16週 (9/6~9/10)

9日に空中写真測量、景観写真撮影。第2調査面での調査開始。遺物包含層  
掘削を開始。

第17週 (9/13~9/17) ~ 第18週 (9/20~9/24)

杭列の断ち割り、断面実測。

第19週 (9/27~10/1)

遺物包含層掘削を終了。

第20週 (10/4~10/8)

遺構検出、遺構掘削開始。

第21週 (10/11~10/15)

調査区東部分にピット集中区を確認。

第22週 (10/18~10/22)

台風到来、復旧作業のため作業進まず。

第23週 (10/25~10/29)

調査区東部分のピット集中区遺構掘削、遺構実測、写真撮影終了。

第24週 (11/1~11/5)

ピット集中区において2軒の四面庇建物跡を確認。断面図実測。

第25週 (11/8~11/12)

11日に空中写真測量、景観写真撮影。

第26週 (11/14~11/19)

14日に現地説明会を実施(参加者148名)。重機によるⅧ層掘削開始。Ⅷ層

上面での遺構検出、遺構掘削、遺構実測、写真撮影開始。

第27週 (11/22~11/26)

重機によるⅧ層掘削終了。

第28週 (11/29~12/3)

遺構掘削、遺構実測、写真撮影終了。南壁面清掃と実測。撤収作業開始。

第29週 (12/6~12/10)

撤収作業終了。

## 平成17年度

第1週（5/9～5/13） 重機による表土掘削。調査区周囲の壁面清掃。断面実測、写真撮影。

第2週（5/16～5/20）～第4週（5/30～6/3）

重機による表土掘削。遺構検出。堅穴住居跡（580SB）掘削、断面実測、写真撮影。ピット・土坑掘削、断面写真撮影。トレンチ掘削。調査区周囲、平面略図実測。グリッド杭打ち。

第5週（6/6～6/10） 重機による暗渠掘削。

第6週（6/13～6/17）～第10週（7/11～7/15）

遺構検出。ピット・土坑掘削、断面実測、写真撮影。遺構平面実測。

第11週（7/19～7/22） VI層（基本層序）検出。

第12週（7/25～7/29） 重機によるVI層掘削。ピット・土坑掘削、断面実測、写真撮影。遺構平面実測。場内清掃。27日にタイムスリップ探検隊（参加者42名）。28日にラジオコントロールヘリコプターによる景観撮影。

第13週（8/1～8/5）～第15週（8/15～8/19）

重機によるVI層（基本層序）掘削。堅穴住居跡（580SB）断ち割り、断面実測、写真撮影。ピット・土坑掘削、断面実測、写真撮影。遺構平面実測。

8日に岐阜県高等学校文化連盟地域研究部会（高校生15名、教諭4名）発掘体験。9日に県教育委員会文化課による完了検査。

12日に飛騨市・高山市中学校社会科教育研究会研修（30名）。

第16週（8/22～8/26）～第17週（8/29～8/31）

ピット・土坑平面実測。現場撤収。31日に国土交通省へ引き渡し。

出土遺物の一次整理は、現場作業と並行して財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター飛騨出張所において行い、二次整理及び報告書作成作業は、三田洞事務所において行った。

発掘調査及び整理作業の体制は次のとおりである。

理事長 日比治男（平成16～17年度） 高木正弘（平成18年度）

副理事長 高橋宏之（平成16～18年度） 平光明彦（平成16～17年度）

中島正和・伊藤克己（平成18年度）

常務理事兼センター所長 福田安昭（平成16年度） 田口久之（平成17～18年度）

経営課長 川瀬崇敏（平成16・17年度） 後藤智（平成18年度）

調査部長 川部誠（平成16年～18年度）

担当課長（飛騨出張所長） 小谷和彦（平成16・17年度） 近藤聰（平成18年度）

担当調査員 近藤聰（平成16年度） 澤村雄一郎（平成17年度）

三島誠（平成18年度）

整理作業員 上田里香・垣添敦子・加藤里佳・清田由美子・瀬戸幸子・知本俊美

林浩美・前畠裕美・村田明美・山田弘子・袖ヶ浦幸子・横山美寧子

脇潤純子

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

野内遺跡は、宮川に合流する川上川左岸、高山盆地北西の山麓に位置し、川上川に並行して連なる段丘崖より上位の段丘面に立地する。背後の見量山の山裾には牧ヶ洞断層が走向する。

遺跡は広範囲に及ぶため、地区ごとに地形が異なる。A地区は北西から南西に向かって緩やかに下がる地形で、高曾洞川によって形成された小規模な扇状地の可能性がある。B地区は見量山から連なる丘陵の南側緩斜面に立地する。C地区はB地区に隣接し、北側は丘陵の南側緩斜面、南側は湿地帯となる。D地区は遺跡の最西部に位置する。調査区西側から東側に向かって緩やかに下がる地形で、見量山の谷からの土砂で形成された扇状地の末端に立地する。山裾に位置することから崖錐・崩積性堆積物によって形成された緩斜面と捉えることもできる。

周辺には、飛騨外縦帯の一部をなす三枝山、濃飛流紋岩からなる見量山がある。三枝山は礫岩・砂岩・凝灰岩・安山岩と多様な岩石（上広瀬層）で構成される。石灰岩はこの層にレンズ状に挟まる層で、かつては石灰の材料として寿美岬に至る高草洞の途中で採掘されていた。高草洞の入口付近から中切付近にかけての山裾には頁岩・砂岩の互層（森部層）が分布する。見量山は濃飛流紋岩からなるが、砂岩・泥岩・礫岩も挟む。部分的に花崗斑岩が分布する。



第5図 周辺の地形と遺跡の立地



第6図 周辺の地質概略図

## 第2節 歴史的環境

高山盆地から古川盆地にかけて多くの遺跡が確認され、発掘調査や試掘確認調査で明らかになった遺跡も多い。ここでは、野内遺跡周辺の川上川左岸の遺跡を中心に時代順に概要を述べる。

縄文時代の遺跡は、見量山東麓の緩斜面に位置する赤保木遺跡（42）・平野遺跡（31）・与島A地点遺跡（27）の一群と、川上川と宮川の合流する地点付近に位置する日焼遺跡（24）・中切遺跡（23）・中切日焼遺跡（22）・中切上野遺跡（19）・宮野B地点遺跡（17）・下切遺跡（16）の一群に分かれる。赤保木遺跡<sup>(1)</sup>では縄文時代中期後半から後期の堅穴住居跡26軒、与島A地点遺跡<sup>(2)</sup>では中期後半の堅穴住居跡1軒、中切上野遺跡<sup>(3)</sup>では前期の堅穴住居跡15軒が確認されている。

弥生時代の遺跡には赤保木遺跡（42）・ウバガ平遺跡（26）がある。赤保木遺跡では弥生時代中期の堅穴住居跡2基を確認されている。

古墳時代の遺跡には、川上川左岸沖積地に位置する赤保木1～6号古墳（37）、川上川と宮川が合流する地点付近に位置する下切古墳（15）・中切王塚古墳（18）・中切上野1～6号古墳（20）・見量山東麓から南東の緩斜面及び丘陵地に位置する与島1～6号古墳（28・29）・上切平野平1・2号古墳（32）・下やせ尾1・2号古墳（36）・ミヨガ平1・2号古墳（41）がある。古墳は川上川左岸に集中しているが、集落跡は、野内遺跡のほかに見量山東麓の緩斜面に位置するウバガ平遺跡が知られるにすぎない。ウバガ平遺跡<sup>(4)</sup>では古墳時代の堅穴住居跡が4軒確認されている。

古代以降は野内遺跡の背後の丘陵地に窯跡が集中する。赤保木1号～6号古窯跡（35）・平野1～3号古窯跡（34）・よしま1～3号古窯跡（25）がある。

中世では主郭・曲輪・堀切をもつ山城である三枝城跡（30）がある。

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	道路名	時代
1	野内遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良～中世前期、近世
2	上野遺跡	古墳～中世
3	御ノ木遺跡	古墳、平安、鎌倉
4	桜木遺跡	古墳～奈良初期
5	森ノ木遺跡	國文中期～後期
6	荒城神社遺跡	國文中期～後期
7	荒神社遺跡	國文
8	ごくの町口古墳	古墳
9	石橋御寺跡	白鳳
10	宮ノ下道跡	國文早期～後期
11	村山古跡	國文、弥生
12	広瀬城跡	室町～安土桃山
13	高丸城跡	安土桃山
14	保原門古墳	古墳前期前頭
15	下切六墳	古墳
16	下切八路	國文時代早期～中期
17	宮野B地点遺跡	國文時代
18	中切上家古墳	5世紀後半
19	中切上野遺跡	國文時代早期～後期
20	中切上野1～6号古墳	7世紀
21	日焼（火燒）古窯跡	奈良
22	中切日焼遺跡	國文時代中期～後期
23	中切遺跡	國文時代中期～後期
24	日焼遺跡	國文時代前期～中期
25	与島1～6号古墳群	7世紀後半～中葉
26	ウバガ平遺跡	平安
27	与島A地点遺跡	國文時代中期
28	よしま1～3号古窯跡	平安後期
29	与島1号古墳	7世紀前半～中葉
30	三枝城跡	古代、室町

番号	道路名	時代
31	平野遺跡	縄文時代中期
32	上切平野1・2号古墳	古墳
33	真六星敷森山古墳	6世紀
34	平野1・3号古窯跡	平安
35	赤保木1～6号古窯跡	奈良～鎌倉
36	下やせ尾1・2号古墳	6世紀
37	赤保木1～7号古墳	5世紀
38	冬原城跡	中世
39	冬原千塚古墳	5世紀
40	加内遺跡	國文時代中期～後期
41	上田ガ平1・2号古墳	古墳
42	赤保木遺跡	國文～古墳
43	下切古窯跡	國文時代前期
44	川上川左岸2～5号古墳群	6世紀後葉～7世紀
45	漢1～3号古墳	7世紀後半～中葉
46	川上川左岸1号古墳	6世紀後葉～7世紀
47	三枝寺廃寺跡	白鳳～奈良
48	三枝寺城跡	室町
49	山田城跡	室町
50	飛騨国分寺跡	奈良
51	飛騨国分寺跡	奈良
52	高丸城跡	室町、近世
53	えんさい寺跡	國文時代
54	鶴谷城跡	室町
55	内切内遺跡	國文時代後期～晚期
56	打越遺跡	國文时代早中期
57	風洞遺跡	國文时代早中期～晚期
58	岩ノ遺跡	國文時代中期
59	松山城跡	室町

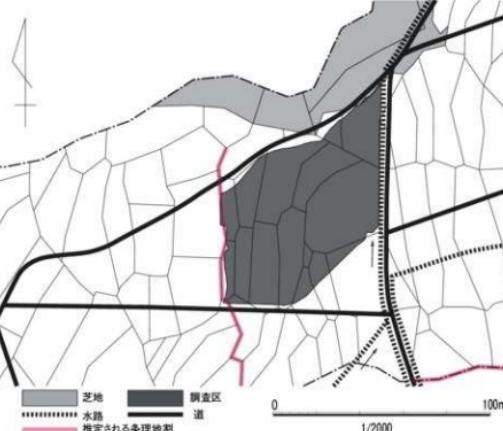


第7図 野内遺跡周辺の遺跡 ( $S = 1 / 50000$  国土地理院発行「飛騨古川」「三日町」「高山」)

高山盆地には条里地割と考えられる方格区画が確認されているが、当遺跡が所在する上切町大字野内にも条里地割が推定されている。D地区から約400m北東側に四坪分の一町方格区画<sup>(5)</sup>があり、主軸はN37°Eを示すとされている<sup>(6)</sup>。地割りは東西方向に長い短冊型を細分化する形となる。

当遺跡が所在する大字野内周辺の字絵図のうち、もっと古いものは明治21年作製のものがある。地割が旧地形や土地利用を反映したり、調査で確認した遺構と関連付けられたりする場合があることから、字絵図の歪みを修整しながら、区画のみをトレースした<sup>(7)</sup>。条理地割で推定されるラインを朱書きで記し、道及び水路は現況のものを参考に合成した(第8図)。調査区の周辺は、一部北側が芝地として利用される他は水田である。芝地として利用された区画は山裾にあたり、地形に沿った区画となる。調査区の東側は、南北方向に長い短冊型の

地割り<sup>(8)</sup>を示すが、調査区内の水田区画は扇状地の地形の地形に沿って長大で不定形な区画となる。調査区まで条理地割があると推定すれば、地形傾斜に対応した坪内地割り<sup>(9)</sup>とも比定されるが、現状では、一町方格の坪が確定できないことから、むしろ、水田の不定形な区画は地形及び水利との関連があると考える。



第8図 明治時代の土地利用図

- (1) 高山市教育委員会1993「前平山稜遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書」  
財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター-2007「赤保木遺跡」
- (2) 高山市教育委員会編1998「高山の文化財」
- (3) 岩田崇・大石崇史2003「飛騨の縄文住居」「関西縄文時代の集落・墓地と生業」(関西縄文論集1)関西縄文文化研究会
- (4) 財團法人岐阜県文化財保護センター-2002「ウバガ平遺跡」岐阜県新発見考古速報2002
- (5) 字絵図をもとにすれば、坪の辺長は平均で約108mである。
- (6) 上枝村史編纂委員会2000「第2章 上枝村の歴史」「上枝村史」を参考とした。字絵図は各組ごとに作成されており、方位にはばらつきがある。現況地形図をもとに補正すると、N 9° Eを示す。
- (7) 調査では、この区画とほぼ同軸・同位置で畦畔基部を確認した。
- (8) 条理地割推定地と坪内地割りの長軸方向が異なる。
- (9) 矢田勝1993「第7節条理型地割と水田」「水田跡調査の方法と研究」(研究紀要Ⅳ)財團法人静岡県埋蔵文化財研究所を参考した。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

当遺跡は、見量山の谷からの土砂で形成された扇状地の末端に立地し、調査区の西側から東側に向かって緩やかに下がる地形である。調査前まで傾斜地を整地して水田として利用されていたため、堆積層が一部削平を受けていた。

基本層序は、調査区周間に掘削した排水溝壁面の土層堆積状況をもとに、I層からX層に分層した。さらに、I層はa～c、X層はa～bに分層した。ただし、当遺跡西側は谷からの土砂堆積（洪水砂）、東側は見量山の崖錐及び崩積性の堆積が相互にあるため、地点によって不安定な堆積を示し、一部の層は欠落していた。Ⅲ層とⅣ層は同一面、Ⅵ層の堆積は調査区の一部で、大半はⅦ層と同一面となっている。Ⅱ層が近世の遺物包含層、Ⅲ層が中世の遺物包含層であるが、他の層で明確な遺物包含層は確認できなかった。各層ごとに遺構検出を行ったが、遺構を検出したのは、Ⅵ層上面とⅧ層上面である。本報告では、便宜的にⅥ層上面で検出した遺構を「第1調査面の遺構」、Ⅷ層上面で検出した遺構を「第2調査面の遺構」として報告する。

以下、基本層序のI a層から順に説明する。

#### I a層 (10YR 4 / 4 暗褐色土)：表土層

調査前まで耕作されていた水田の耕作土である。しまりのある粘質シルトである。

#### I b層 (10YR 4 / 3 にぶい黄褐色土)：表土層、水田の区画整理が行われた際の客土

所々に山土（10YR 6 / 8 明黄褐色）がブロック状に混入する。かなりしまりのある粘質シルトで、径10～30cm程度のサバ石粒が多く混入する。

#### I c層 (10YR 3 / 3 暗褐色土)：表土層、旧耕作土

しまりのある粘質シルトで、径3mm以下のサバ石粒が混入する。

#### II層 (10YR 2 / 1 黒色土)：遺物包含層

近世の遺物を多く含み、近世の耕作土と考えられる。しまりのある粘質シルトで、径5mm以下のサバ石粒が混入する。また径5mm程度の炭化粒も混入する。

#### III層 (10YR 2 / 3 黒褐色土)：遺物包含層

中世の遺物を多く含む。かなりしまりのある粘質シルトで、径5mm以下のサバ石粒が多く混入するとともに、径10mm程度のサバ石粒（角礫）も混入する。なお、このⅢ層の上面には、調査区西部分に洪水砂の広がりが見られた。

#### IV層 (10YR 2 / 2 黒褐色土)：無遺物層

調査区東部分の山側にのみ堆積する土である。山側を除く区域に広がって堆積するⅢ層に対応する土層と考えられる。しまりのある粘質シルトで、径5mm以下のサバ石粒が非常に多く混入するとともに、径10mm程度のサバ石粒（角礫）がわずかに混入する。

#### V層 (10YR 6 / 3 にぶい黄橙色土)：洪水砂層、無遺物層

しまりのない砂で、径5mm以下のサバ石粒が混入する。

**VI層 (10YR 2 / 1 黒色土) : 無遺物層**

しまりがある粘質シルトで、粘質がかなりある。3mm以下程度のサバ石粒が混入する。一部、削平により堆積がみられない区域が存在する。

**VII層 (10YR 6 / 3 にぶい黄橙色土) : 洪水砂層、無遺物層**

しまりない砂で、径1mm以下のサバ石粒、径10~30mm程度のサバ石（角砾）、極小の砂粒（10YR 6 / 1 暗灰色）が多く混入する。

**VIII層 (N 1.5 / 0 黒色土) : 無遺物層**

調査区はほぼ全域に厚く堆積する。植物繊維痕が多く混入し、湿地堆積の土層と考えられる。しまりがある粘質シルトで、粘土に近い。径1mm以下のサバ石粒が混入する。VII層と比べ、10mm以上のサバ石粒（角砾）がほとんど混入しない。

**IX層 (10YR 2 / 1 黒色土) : 無遺物層**

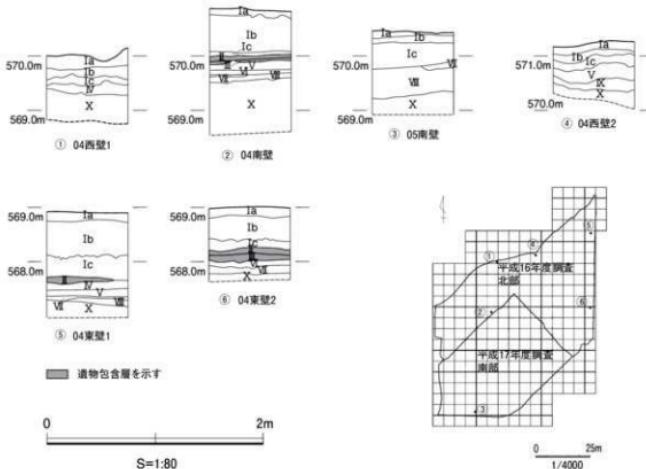
調査区山側の西部分の一部に堆積する。しまりがある粘質シルトで、粘性がかなりあり、径5mm以下のサバ石粒が混入する。径10mm程度のサバ石（角砾）も少々混入し、所々に山土（10YR 5 / 3 にぶい黄褐色）がブロック状に混入する。

**Xa層 (5 Y 8 / 1 灰白色) : 基盤層**

かなりしまる粘土層で、極小の砂が混入する。

**Xb層 (5 Y 8 / 1 灰白色) : 基盤層**

かなりしまる粘土層で、砂が多く混入した土層である。



第9図 基本層序

## 第2節 遺構・遺物の概要

今回の調査では、縄文時代、弥生時代後期、古代、中世の遺構を検出した。

### 1 遺構の概要

遺構は、竪穴住居跡（SB）、掘立柱建物跡（SH）、柱列跡（SA）、土坑（SK）、ピット（P）、炉跡（SF）、溝跡（SD）、水田遺構（ST）、杭列跡（SS）、不明遺構（SX）に分けた。各調査面ごとに検出した遺構数は第3表に示した。各遺構の概要是、次のとおりである。

#### (1) 竪穴住居跡（SB）

調査区南部の第2調査面で1軒検出した。コの字状石圓炉を持つ。出土遺物から、弥生時代後期と考えられる。

#### (2) 掘立柱建物跡（SH）

第1調査面で3棟、第2調査面で4棟の合計7棟検出した。このうち、6棟は中世の四面庇を持つ掘立柱建物跡であると考えられる。

#### (3) 柱列跡（SA）

柱穴状の土坑が一列に並ぶものを柱列跡とし、調査区北部の第1調査面で並行する3列を確認した。

#### (4) 土坑（SK）

直径1m以上の穴を土坑とした。第1調査面で7基、第2調査面で9基の合計16基検出した。

#### (5) ピット（P）

直径1m未満の穴をピットとした。ピットには竪穴住居跡、掘立柱建物跡や柱穴列等の柱穴も含んでいる。第1調査面で93基、第2調査面で383基の合計476基検出した。

#### (6) 炉跡（SF）

竪穴住居跡でコの字状石圓炉を1基検出した。

#### (7) 溝跡（SD）

ほぼ一定幅で細長く掘り込まれた遺構を溝跡とした。第1調査面で19条、第2調査面で20条の合計39条検出した。埋土がラミナ状に堆積するものが多く（167・261・271・279・280・782・858・900・920S D以外）、流路の可能性がある。782 S Dは縄文時代の遺構と考えられる。

#### (8) 水田遺構（ST）

畦畔によって囲まれた区画を水田遺構とした。調査区の北西部の第1調査面で11区画検出した。南西から北東に向かって規則的に並んでいるが、平面は不定形で、規模も不定である。出土遺物から、古代の遺構と考えられる。

#### (9) 杭列跡（SS）

木杭が1列に並んで検出された遺構を杭列とした。第1調査面で5列確認した。

#### (10) 不明遺構（SX）

不定形で性格不明の遺構を不明遺構とした。第1調査面で1基、第2調査面で2基の合計3基検

第3表 検出した遺構数

No.	遺構種別	遺構略号	第1調査面	第2調査面	合計
1	竪穴住居跡	SB	0	1	1
2	掘立柱建物跡	SH	3	4	7
3	柱列跡	SA	3	0	3
4	土坑	SK	7	9	16
5	ピット	P	93	383	476
6	炉跡	SF	0	1	1
7	溝跡	SD	19	20	39
8	水田遺構	ST	11	0	11
9	杭列跡	SS	5	0	5
10	不明遺構	SX	1	2	3
		合計	142	420	562

出した。

本報告書における遺構等については、次のように記載した。

#### ①遺構名称

遺構名称については、34S Dや791Pのように調査時の遺構番号と前述の遺構略号を組み合わせて記載した。ただし、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列跡、杭列跡については、調査時と別にSB1やSH2のように遺構略号と遺構番号を組み合わせて振り直した。遺構番号については、平成16年度調査では1番から、平成17年度調査では500番から付けており、通番ではない。

#### ②遺構図

掲載した遺構図のうち、調査区全体図及び分割図（第68図～第108図）は、掘形の上端と下端を実線で示した。調査のため掘削した試掘確認坑や現代の搅乱坑は、「T」字状の記号を連続させて表現した。縮尺は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列跡の平面図は1/40若しくは1/100とした。その他断面図は1/40とした。

#### ③遺構の平面形状

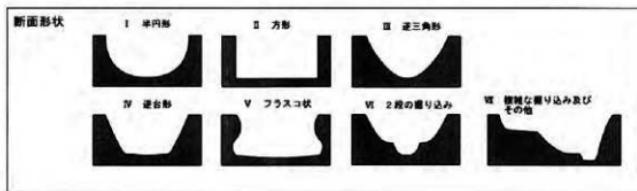
掘形の上端と下端における形状とした。円形、梢円形を「a」、方形・長方形を「b」、それ以外のものは不定形とし「c」とした。

#### ④遺構の底面形状

平坦なものを「a」、擂鉢状のものを「b」、それ以外のものを「c」とした。

#### ⑤遺構の断面形状

第10図のとおり、「I」～「VII」に分類した。



第10図 遺構断面形状分類図

#### ⑥遺構の埋土堆積状況

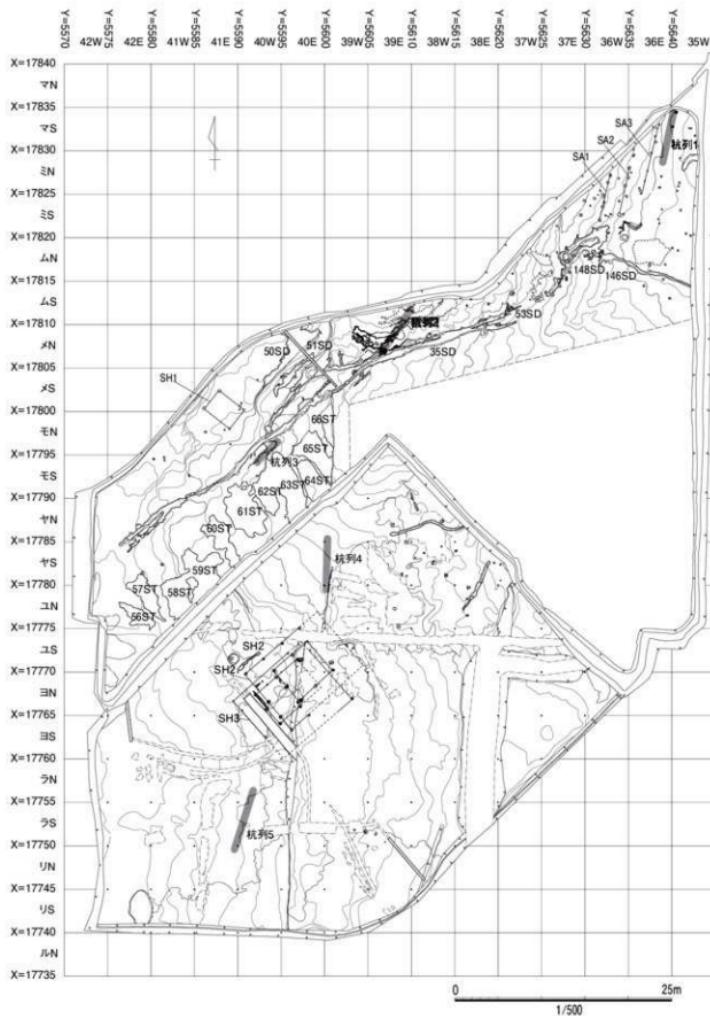
単層のものを「a」、複層のものを「b」とした。

#### ⑦遺構の所属時期

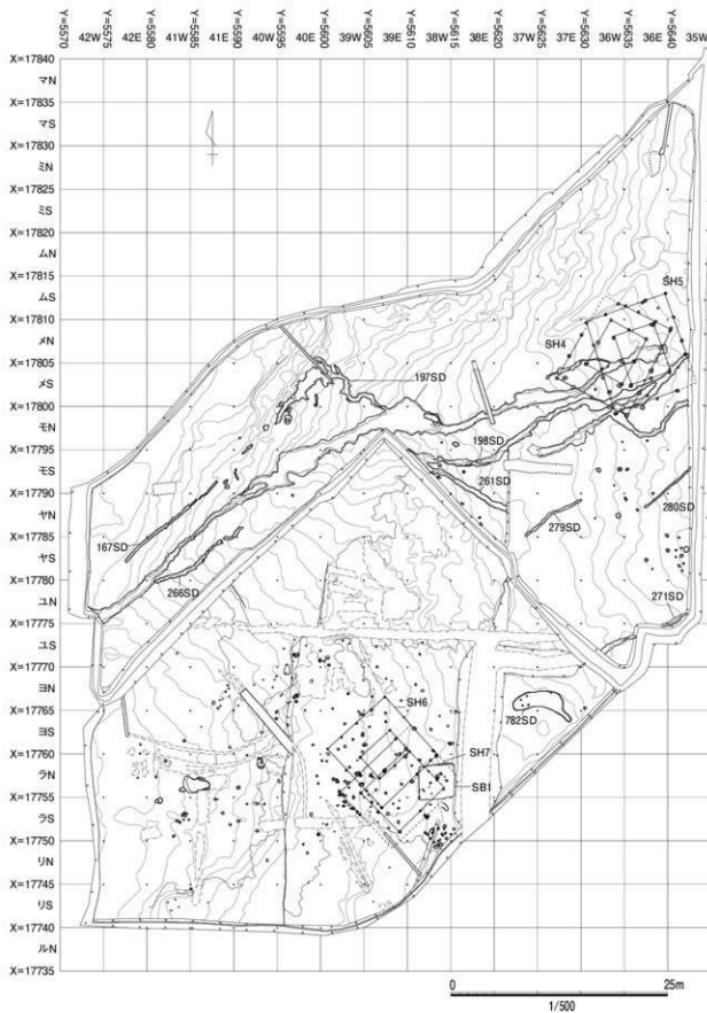
原則として、最も新しい遺物の時期によって遺構の所属時期とした。ただし、古い時期の遺物の出土量が圧倒的に多い場合や完形に近い遺物が出土した場合は、その遺物の時期を遺構の所属時期と判断した。

#### ⑧遺物番号

文章中に報告書掲載の遺物がある場合は、灰釉陶器3点(24)のように括弧内に遺物掲載番号を記載した。



第11図 第1調査面遺構配置図



第12図 第2調査面遺構配置図

## 2 遺物の概要

縄文時代から近世までの遺物が2,519点出土した（土器は接合前の遺物破片数）。遺物の種類・出土点数は、第4表のとおりである。表中の「弥生土器若しくは土師器」としたものは、小破片や胴部の破片のもののうち、器表面が摩耗し調整痕等の観察が困難なため、弥生土器か土師器か判別できなかつたものをまとめた。種別では本製品が遺物点数全体の約半分を占めている。土器では、弥生土器や須恵器の割合が多い。

第4表 遺物出土点数

種別	遺跡出土(点)	種類別割合(%)	遺物包含層出土(点)	種類別割合(%)	合計(点)	種類別割合(%)
縄文土器	47	7.3	4	0.2	51	2.0
弥生土器	100	15.5	41	2.1	141	5.4
弥生もしくは土師器	50	7.7	122	6.3	172	6.6
須恵器	77	11.9	397	20.4	474	18.3
土師器	106	16.4	109	5.6	215	8.3
灰釉系陶器	6	0.9	80	4.1	86	3.3
古窯戸	23	3.6	108	5.6	131	5.1
常滑陶器	3	0.5	10	0.5	13	0.5
中国磁器	0	0.0	1	0.1	1	0.0
その他(珠洲・美濃 須恵など)	2	0.3	13	0.7	15	0.6
その他	1	0.2	4	0.2	5	0.2
石製品	2	0.3	17	0.9	19	0.7
木製品	10	1.5	20	1.0	30	1.2
金属製品・錢貨	212	32.8	1,005	51.7	1,217	47.0
土製品	6	0.9	12	0.6	18	0.7
合計	646	100.0	1,945	100.0	2,591	100.0

### (1) 土器・土製品の分類

土器は、遺構の所属時期を推定する判断材料になるとともに、器種の量比によって調査場所の性格を特定する資料となる。分類は、器種の判別が難しい細片についてもなるべく分類を可能にするため、既存の研究<sup>(1)</sup>を基に分類をした（第5表）。また、土器の年代観については、既存の土器編年を使用した。なお、個々の遺物の分類については、泉拓良（縄文土器）、牛丸岳彦・小淵忠司（須恵器、灰釉陶器）、山茶碗・古窯戸陶器）各氏の御教示を受けた。

第5表 土器・土製品分類表

時代	種別	器種名	用途	産地
縄文	縄文土器	深鉢	調理具	
弥生	弥生土器	甕・高环・壺・器台	調理具 供膳具	
古墳・古代	須恵器	杯身・碗・杯蓋	供膳具	
	鉢	鉢・壺・瓶・甕	貯藏具	
	土師器	甕	調理具	
	灰釉陶器	碗	供膳具	
中世	灰釉系陶器	碗（均質手・荒肌手） 盤（均質手・荒肌手） (均質手・北陸系) (荒肌手・南洋系)	供膳具	北部系 (東濃) 南部系 (尾張)
		片口鉢（荒肌手）	調理具	
	常滑陶器	甕	貯藏具	常滑
	珠洲產陶器	甕	貯藏具	珠洲
	古窯戸系陶器	甕	喫茶具	窯戸美濃
	中国產磁器	甕・瓶（青磁・白磁・染付）	供膳具	中国
近世	土製品	土鍤	漁労具	

### ①縄文土器

51点出土した。器表面に押型文を施す縄文時代早期前半の土器2点(76)と条線文を施す縄文中期後半の土器1点の他は、無文土器の小破片のため、時期が不明である。

### ②弥生土器

141点出土した。器種別では、甕100点、高坏若しくは器台15点、壺1点、器種不明のもの25点である。このうち、91点は堅穴住居跡(SB1)の埋土から出土した。堅穴住居跡の埋土から出土した土器のうち、時期を判別できたものは、すべて中期後半に属する。甕は法仏式(51)や能登型(53)といった北陸系土器、高坏若しくは器台は山中式(50)といった東海系土器となる。この他に、遺物包含層出土ではあるが、弥生時代中期の横羽状文甕の胴部片2点が出土した。

### ③須恵器

474点出土した。器種別では环身25点、环蓋50点、高坏85点、碗6点、鉢4点、壺66点、瓶5点、甕108点、器種不明のもの125点である。時期・型式別にみると、5世紀の有蓋高坏2点(68・92、中村編年I型式4~5段階比定)、5世紀の环身1点(87、中村編年II型式第5段階比定)、8世紀の环蓋1点(84)、奈良時代から平安時代の环身1点(37)・有台碗2点(98・99)が出土した。

### ④土師器(古墳時代・古代)

215点出土した。器種別では甕172点、皿1点、器種不明42点である。甕の胎土は粗く黄褐色である。厚手・薄手の2タイプがみられるようであるが、胴部の小破片が大半であることや個体数の少なさから特に分類を行わなかった。皿はロクロ成形のもので、小野木分類B1a類z類に比定される。

### ⑤灰釉陶器

86点出土した。器種別では碗56点、皿2点、瓶7点、器種不明21点である。高台の形態から型式が分かる資料は33点あり、黒篠90号窯式が20点(36・115・116)、折戸53号窯式が13点(57・118~123・129)となる。内外面全体は、通常ハケ塗りや付け掛けによる施釉が見られるが、当地区的灰釉陶器では見られなかった。9世紀後半から

第6表 山茶碗一覧表

10世紀前半のものが多い。

### ⑥山茶碗

131点出土した。灰釉陶器に統いて生産が行われ、その系譜を引く陶器の一群を山茶碗とした。器種別では、碗94点、皿10点、鉢2点、器種不明25点である。

	荒肌手			均質手				合計
	碗	皿	その他	碗	皿	鉢	その他	
3型式								0
4型式				2				2
5型式		2		4				6
6型式				1	3			4
7型式				1				1
8型式				3				3
時期不明	1			82	5	2	25	115
合計	1	2	0	93	8	2	25	131

山茶碗は產地別に5類型が設定されているが、胎土が砂質のものについては濃濃須産と区別できないものも含まれるため、「荒肌手」「均質手」といった見た目と肌触りを主とした分類とした。荒肌手の山茶碗3点、均質手の山茶碗128点と均質手の割合が圧倒的に多い。時期・型式別にみると4型式から8型式(12世紀前半から14世紀前半頃)のものが出土しているが、5型式~6型式(12世紀後半から13世紀前半頃)にかけてのものが比較的多い。

### ⑦中国磁器

15点出土した。器種別は、青磁碗9点、白磁碗5点、白磁皿1点である。青磁は龍泉窯系で体部外

面に鏽連弁文（137・138）や連弁文を施す。

#### ⑥中世陶器

13点出土した。器種別では、碗4点、壺3点、甕6点である。

#### （2）木製品類の分類

当遺跡で出土した木製品は、既存の報告書<sup>2)</sup>を基に、第7表のように分類した。個々の遺物の分類については千藤克彦氏（木製品全般）、近藤大典・篠木幸司・林芳樹（木簡）、各氏の御教示を受けた。

第7表 木製品分類

用途	分類1	分類2
服飾・装身具	下駄	連續下駄・差し歛下駄
食器	箸状木製品	
育髪	曲物・折敷・漆製品	
鍵具	燃えさし	
土木材	杭	木取りによる分類
建築部材	柱根	
用道不明品	板状木製品・棒状木製品	
木簡	木簡	

第8表 木製品出土一覧表

	S	K	P	SD	S	T	杭列 1	杭列 2	杭列 3	杭列 4	杭列 5	遺物 包合層	試掘	合計
下駄	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	3
箸状木製品	0	16	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	25
曲物	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	8
漆製品	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
折敷	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
燃えさし	1	25	13	1	0	0	0	0	0	0	0	465	0	505
杭	0	1	6	0	13	6	7	7	10	10	10	55	0	105
柱根	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	6
板状木製品	1	47	42	0	0	0	0	0	0	0	0	450	0	540
棒状木製品	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	18
用道不明品	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	5
木簡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	3	81	65	1	13	6	7	7	10	10	10	986	0	1218

#### ①下駄

連續下駄2点、差し歛下駄1点が出土した。連續下駄のうち1点（65）は中世前期の掘立柱建物跡（SH 5）関連のピットから出土した。

#### ②箸状木製品

細い棒状の材で端を尖らせたものを箸状木製品とした。末端を斜めに切断するタイプが1点（遺物掲載番号10）あるだけで、他はすべて両端を尖らせるタイプである。中世前期の掘立柱建物跡（SH 2・3）関連のピットからまとめて出土した。

#### ③容器

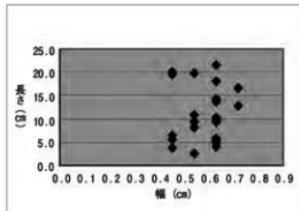
曲物8点、折敷1点、漆製品（椀）1点が出土した。

#### ④燃えさし

先端が炭化した棒状及び板状の材を燃えさしとした。505点出土した。遺物包含層出土が圧倒的に多く、全体の9割を占める。幅0.5cmから2cmの間にまとまりがある。

#### ⑤杭

105点出土した。木取りにより、I類を丸木芯持ち材、II類を割り材とした。さらにII類を4つに細分し、1類を単なる割材（1/2以下）、2類を芯部側を削るもの、3類を木肌側を削るもの、4類を半割材とした。遺物包含層からの出土が多いが、杭が列状に並ぶものが5列あり、杭列として第3章第2節に掲載した。



第13図 箸状木製品長幅比

**⑥柱根**

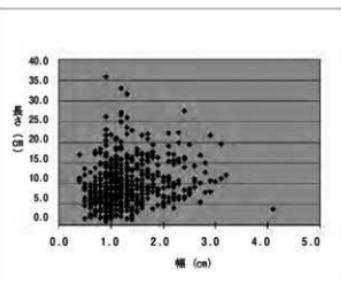
3点出土した。いずれも木肌部を削り、断面を多角形に整える。

**⑦板状木製品・棒状木製品**

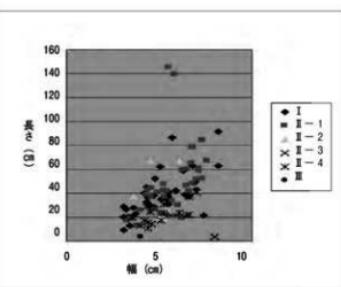
これまでの分類に含まれない板状の加工材を板状木製品、棒状で端部を切断しているものを棒状木製品とした。板状木製品が540点、棒状木製品18点出土した。未製品と考えられるものではなく、建築部材の一部や曲げ物の底板の可能性があるものも含まれる。

**⑧木簡 (第60図-179)**

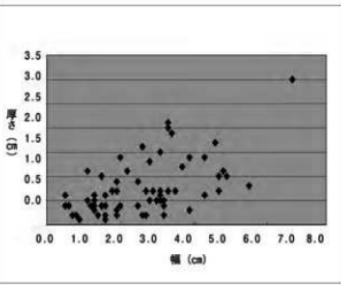
1点出土した。長さ10.2cm、幅4.3cm、厚さ0.6cmである。木材は肉眼観察からヒノキと推定され、木取りは板目である。

**駄文<sup>(3)</sup>**

第14図 燃えさし長幅比



第15図 杭長幅比



第16図 板状・棒状木製品幅厚比



## (3) 石器類

石器類31点が出土した。石器類は点数が少なく細分できないため、既存の器種分類を基にした分類<sup>(4)</sup>にとどめた。しかしながら、石器は個別に特徴が異なるため、個々が比較できるように、掲載しない遺物についても観察表を掲載した。観察表の記載方法は、次のとおりとした。

**長さ・幅・厚さ・剥離角の計測方法** 製品としての軸を基準に計測したが、調整剥離を施す剥片（RF）・微細な剥離痕を有する剥片（MF）・剥片・碎片は主要剥離面の剥離軸を基準に計測した。剥離角は1度刻みで示した。

**石器の遺存状況** 完成品と破損品に区別した。完成品は「完」と表記した。破損品は横割れと縦割れに区分し、それぞれを細分した。横割れは基部と末端部の遺存に注目し、基部付きは「H」、基部・末端部なしは「M」、尾部付きは「B」に細分した。縦割れは、左側縁付きは「L」、右側縁付きは「R」、両側縁無し「横M」とした。観察表はこの記号の組み合わせで表記した。

**石器の背面構成** 背面を形成する剥離面の最終打面を基準として、最終打面に由来するものは「H」、これに対抗するものは「B」、背面からみて旧右設打面によるものは「R」、旧左設打面によるものは「L」とした。この他に自然面「N」と節理面「C」に区別した。

**石器の打面形状** 穹打面を「A」、平坦打面を「B」、切子打面を「C」、点打面を「D」、線打面を「E」、無打面を「F」、折れを「G」、加工を「H」に分けて、区分した。

石材別にみると、打製（押圧剥離系）は、下呂石・黒耀石製が多く、製品・剥片類とともに出土した。

打製（直接打撃）系は、安山岩B・泥岩製で製品のみ出土した。複合技術系は蛇紋岩製の磨製石斧1点、使用痕系は砂岩製の磨石・流紋岩製の石皿・アブライト製の砥石それぞれ1点ずつ出土した。

第9表 石器類器種別数量

石器系列	打製（押圧剥離）系						打製（直接打撃）系						複合技術系			使用痕系		
	スライ	樹形	R	F	MF	粗	打製	石斧	R	F	粗	磨製石斧	磨石	石皿	砥石	合計		
石材・器種	石器	バー	石器	石器	石器	石器	打製	石斧	打製	石斧	打製	磨製石斧	磨石	石皿	砥石	合計		
木材	1	1	0	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7		
黒耀石	1	1	2	4	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	12		
下呂石	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
波紋岩A	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
波紋岩B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1		
安山岩A	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
安山岩B	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2		
蛇紋岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		
チート	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
泥岩	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	3		
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1		
アブライト	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
点数合計	2	3	4	2	2	9	4	1	0	1	1	1	1	1	1	31		

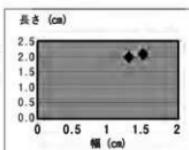
石材のあとに表記したAは緻密なもの、Bは粗いものを示す

## (1)石器

鋭利な先端部と柄を装着するための基部を作り出した小型の石器をまとめた。2点出土した。無茎鐵であり、石材・基部抉りの形状が異なるものの、長さ・幅の差はあまり認められない。

## (2)スクレイパー

素材剥片の縁辺部に連続した剥離を施し、一個辺に1/2以上の範囲に刃部を作りだした石器をまとめた。3点出土した。102・110は下呂石製で



第17図 石器長幅分布図

刃部幅の広いラウンドスクレイパー、遺物掲載番号103は黒耀石製で刃部幅の短いエンドスクレイパーで、石材により刃部幅に差が認められるが、出土点数はすくないため、このような傾向があることだけに止めた。

#### ③楔形石器

剥片の相対する二側辺に潰れ状の剥離痕が見られる石器をまとめた。4点出土した。楔形石器としたものは、全て下呂石製で長さ・幅にまとまりがあり、側辺に両極打法による楕円状の剥離痕がある。背面・腹面ともに側辺からの剥離痕がないことから、二極一対のものと思われる。

#### ④調整剥離を施す剥片（RF）

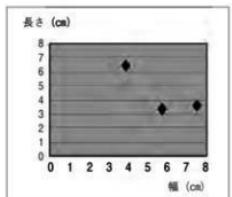
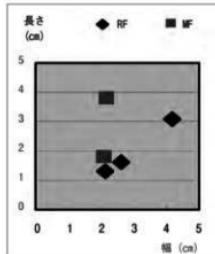
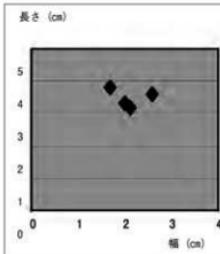
縁辺の一部に二次加工を施すもののうち、折損のため、スクレイパーなどの器種認定できない石器をまとめた。3点出土した。2点が石錐の可能性があるもの、1点が打製石斧の可能性があるものである。

#### ⑤微細な剥離痕を有する剥片（MF）

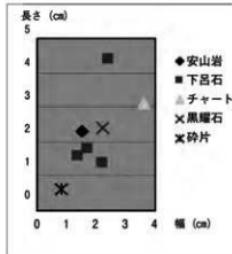
微細な剥離痕が不連続に施される石器、又は、無加工で使用痕のある石器をまとめた。2点出土した。2点ともに背面に原縛面を残す。

#### ⑥剥片類（F）

剥片剥離作業によって生じた剥片をまとめた。9点出土した。1cm以上を剥片、1cm未満を碎片とした。剥片のうち、チャートと黒耀石製のものは背面を原縛面で覆われており、肉厚であることから、石核打面調整剥片と思われる。碎片としたものは、打面が相対する小さな剥離痕に覆われることから石錐や石錐などの小型の剥片石器を製作する際に生じた碎片か、折損品の可能性が高い。



第18図 スクレイパー長幅分布図



第19図 楔形石器長幅分布図

第20図 RF・MF長幅分布図

第21図 剥片長幅分布図

#### ⑦打製石斧

川原石及び川原石素材の剥片や板状の剥片を利用し、長軸の一端に刃部を作りだした石器をまとめた。4点出土した。

#### ⑧磨製石斧

敲打・剥離により成形し、研磨を加えて仕上げられた斧形の石器をまとめた。1点出土した。

## ⑨磨石

拳大の川原石を用い、その表面に使用痕としての磨痕が確認できる石器をまとめた。1点出土した。

## ⑩石皿 (112)

川原石の平坦な面に磨痕が確認できる石器をまとめた。1点出土した。

## ⑪砥石 (107)

礫の表面に溝状や帯状の痕跡や砥面が認められるものをまとめた。1点出土した。

## (4) 金属製品・銭貨類

金属製品16点、銭貨2点が出土した。

金属製品については、破損し、原形を留めないものが大半であった。3点のみ破損はあるものの機能や用途を推定できる部分があったため、掲載した。

銭貨類は北宋銭2枚が出土した<sup>(5)</sup>。

(1) ここで用いた型式及び用語は次の論文等を参照した。

## 弥生土器

赤塚次郎1992「山中式土器について」「山中遺跡」

赤塚次郎編2002「弥生・古墳時代・土器Ⅱ」「考古資料大観第2巻」小学館

加納俊介・石黒立人2002「弥生土器の様式と編年」

## 須恵器

大阪府立近づ飛鳥博物館2006「年代のものさし－須貝の須恵器－」

賀元洋2000「猿投窯・調西窯出土須恵器の主要器種分類」「須恵器の出現と消滅」第1分冊 第1回東海土器研究会

尾野善裕2000「猿投窯出土須恵器の主要器種分類」同上

## 灰釉陶器

齊藤孝正1995「東海地方の施釉陶器生産」「須恵器集成図録」第3巻東日本編

## 古瀬戸

藤澤良祐1997「中世瀬戸窯の動態」「研究紀要」第5輯 財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター

## 中国陶磁器

横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4

森田勉1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究」第2号日本貿易陶磁研究会

上田秀夫1982「14~16世紀の青磁碗の分類」同上

小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」同上

## 土師器（古代）

城ヶ谷和広1996「東海地方の古代煮沸具の様相と諸問題」「鍋と甕 そのデザイン」前掲

(2) 財團法人岐阜県教育文化財团文化財保護センター2005「第4章第5節 木製品の概要」「柿田遺跡」

(3) 木簡の訳説については佐木幸司氏・林芳樹氏に、木簡訳文の符号・型式番号については近藤大典氏に御教示いただいた。

木簡訳文の符号・型式番号については原則として木簡学会編「木簡研究」に従い、上記脚注2の「柿田遺跡」の報告書



## 24 第3章 調査の成果

を参考に記載した。ここで使用した原則は次のとおりである。

「 」 本筋の上端並び下端が原形を留めていることを示す（端とは本筋方向の上下両端をいう）。

□□□ 欠損文字のうち、字数が確認できるもの。

〔 〕 欠損文字のうち、字数が数えられないもの。

× 前後に文字が続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

〔 〕 校訂に関する註で、本文に置き換わるべき文字を含むもの。原則として文字の右傍に付す。

カ 編者が加えた註で、疑問が残るもの。

型式 ●●●

(4) 竹岡後樹1989『石器研究法』言叢社を参考にした。

(5) 古銭の識別については山内裕行氏にご教示いただいた。細分類名は小川清1976『改訂北宋符合泉譜』日本古銭研究会を参考

にした。



## 第3節 第1調査面の遺構と遺物

### 1 検出した遺構

第一調査面（VI層上面）で検出した遺構のうち、掘立柱建物跡3棟、柱列跡3列、溝6条、水田遺構11区画、杭列跡5列を報告する。このうち、SH2・3については、整理作業時に同時代（中世前期）の建物跡である四面庇をもつ掘立柱建物跡（SH4・5）と形状・規模・柱間を再度比較検討をした結果、規模・形状が類似し、また柱穴配置が規則的に配列されていることを確認したため、四面庇をもつ掘立柱建物跡とした。新たに掘立柱建物の柱穴と認定した遺構については断面図がないため、平面図のみ図示した。

#### （1）掘立柱建物跡（SH）

##### SH1（第22図・写真図版3）

**位置・検出状況** 調査区南部の40メスW、41メスE、41モN Eで検出した。建物跡の北西側は調査区外となるため、北西側に延びる可能性もある。

**形状と規模** 平面形は長方形である。長辺約3.6m（7P・9P間）、短辺約2.7m（9P・12P間）、面積は9.7m<sup>2</sup>を測る。建物跡の主軸は北西→南東方向とする。

**柱穴の状況** 柱穴は4基（7P・9P・11P・12P）で構成される。それぞれの柱穴は底に近い部分だけが残存した状態であるため、深さは0.1m程度と非常に浅い。11Pでは、坑底付近で柱根の最下部が残存しており、柱の直径は20cm程度のものと推定される。12Pでは、柱根状の堆積を確認した。

**出土遺物** なし。

**時期** 遺構内から出土した土器がないため、所属時期は不明である。

##### SH2（第23図・写真図版3）

**位置・検出状況** 調査区北部の39ヨNW、40ユS E、40ヨN E他で検出した。

**形状と規模** 四面庇をもち、庇部分を含めて梁行4間（8.4m）×桁行4間（10.9m）の掘立柱建物跡である。柱間の平均は、外側が梁行方向2.1m、桁行方向2.7m、内側が梁行方向2.3m、桁行方向2.6mとなる。庇部分の面積は91.5m<sup>2</sup>、身舎部分の面積は23.9m<sup>2</sup>である。SH3と同一の北西→南東方向に建物跡の主軸方向をとる。南北方向の雨落ち溝跡（821SD）を完掘した状態でSH3の柱穴（912P）を検出したことから、SH2がSH3を切っていることがわかる。またSH2とSH3は、同一方向に主軸をとるため、SH2はSH3を建て替えた建物の可能性がある。

**柱穴の状況** 16基（769P・779P・725P・718P・716P・768P・724P・723P・722P・653P・796P・781P・921P・780P・816P・727P）で構成される。柱堀形は円形で柱痕跡を2基（723P、724P）を確認した。建物跡に平行して雨落ち溝跡（東西方向822SD、南北方向821SD）を確認した。

**出土遺物** 索状の木製品が柱穴内から多く出土した。779Pから木製品5点、725Pから木製品2点、724Pから山茶碗1点（1）、木製品11点（2～10）、796Pから木製品5点（11～15）、781Pから木製品7点（16～20）、780Pから木製品2点（21・22）が出土した。また、雨落ち溝跡（821SD）から木製品4点（25）が出土した。

**時期** 柱穴から出土した土器から、所属時期は中世前期（12世紀後半から13世紀前半）と考えられる。

**S H 3 (第23図・写真図版3)**

**位置・検出状況** 調査区北部の40ヨ S E、40ヨ N E、40ヨ NW他で検出した。

**形状と規模** 四面庇をもち、庇部分を含めて東西2間(9.0m)×南北2間(10.5m)の掘立柱建物跡である。柱間の平均は、外側が梁行方向1.8m、桁行方向2.1m、内側が梁行方向4.4m、桁行方向3.2mとなる。庇部分の面積94.5m<sup>2</sup>、身舎部分の面積28.2m<sup>2</sup>で、S H 4と同一の北西-南東方向に建物跡の主軸方向をとる。梁行方向と桁行方向の柱間の比率はS H 2とほぼ同じである。

**柱穴の状況** 14基(1012P・1004P・970P・912P・771P・717P・872P・685P・988P・810P・648P・986P・826P・647P)が属する。771Pは、912Pと717Pを結ぶライン上から若干ずれるが、柱間の距離がほぼ等しい柱穴跡であることからS H 3に含めた。柱頭形は円形で、柱根は残存しないが、3基(912P・872P・810P)で柱痕跡を確認した。

**出土遺物** 912Pから土師器1点、771Pから木製品16点、872Pから木製品2点(23・24)、647Pから金属製品1点が出土した。

**時期** 柱穴出土の土師器は細片で摩耗しているため、時期認定ができなかった。南北方向の雨落ち溝跡(821S D)を完掘した状態でS H 3の柱穴(912P)を検出していることから、S H 2よりも古い時期の遺構と考えられる。

**(2) 柱列跡(S A)****S A 1 (第27図・写真図版4)**

**位置・検出状況** 調査区北部の36ミ NW、36ミ SWで検出した。

**形状と規模** ほぼ一列に並んでおり、5基の柱穴(88P・87P・86P・84P・99P)で構成される。このうち、87P-86P-99Pが間隔が約2.3mとなる。

**柱穴の状況** 88Pで柱痕状の堆積、87Pで基底面上に礎盤、86Pで断面形が2段となる。

**出土遺物** なし

**時期** 遺構から出土した土器がないため、所属時期は不明である。

**S A 2 (第27図・写真図版4)**

**位置・検出状況** 調査区北部の36ミ NW、36ミ SWで検出した。

**形状と規模** ほぼ一列に並んでおり、5基の柱穴(111P・109P・107P・106P・97P)で構成される。このうち、111P-109P-106Pの間隔が約2.2mとなる。

**柱穴の状況** 109Pで柱根の一部が残存する。107P・106Pで柱痕状の堆積を確認した。

**出土遺物** なし

**時期** 遺構内から出土した土器がないため、所属時期は不明である。

**S A 3 (第27図・写真図版4)**

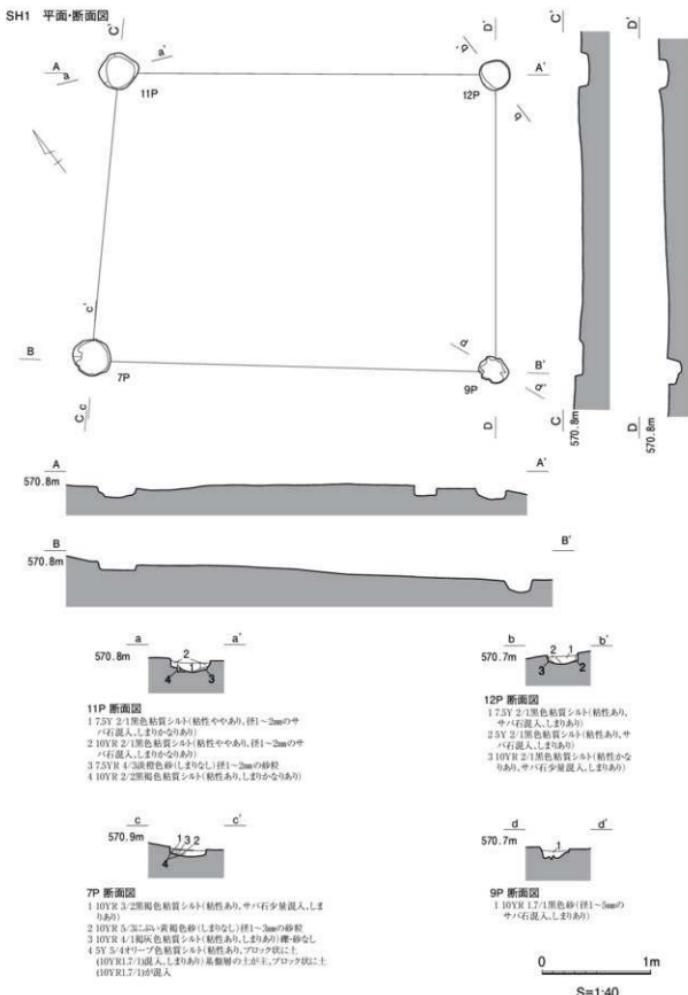
**位置・検出状況** 調査区北部の36マ S E、36ミ N Eで検出した。

**形状と規模** ほぼ一列に並んでおり、6基(117P・115P・114P・113P・112P・104P)で構成される。このうち、117P-114P-112Pの間隔が約3.4mとなる。

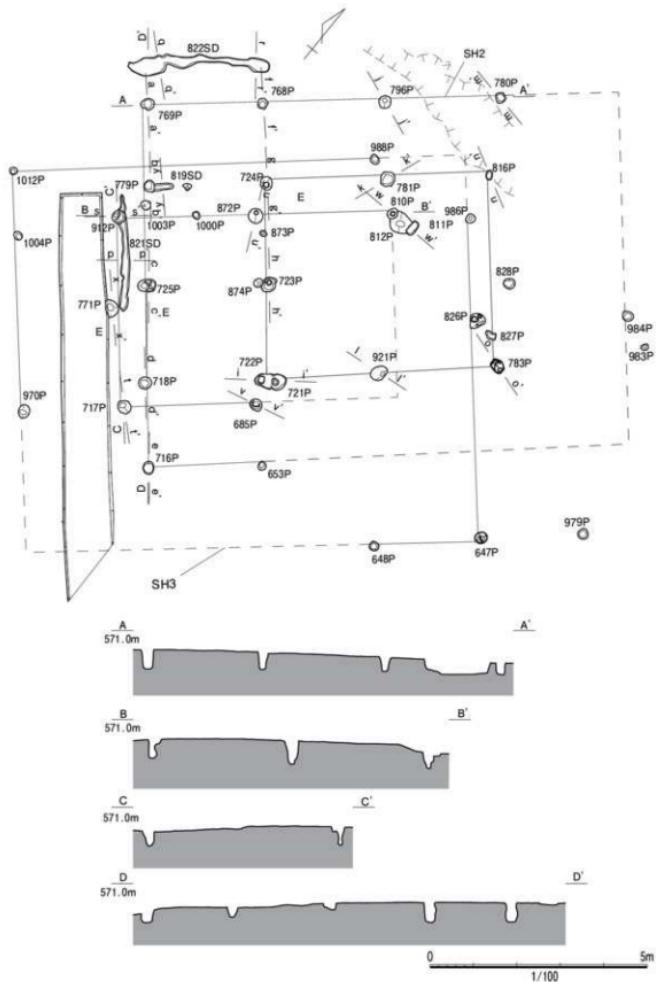
**柱穴の状況** 柱根及び柱痕状の堆積は認められなかった。

**出土遺物** なし

**時期** 遺構内から出土した土器がないため、所属時期は不明である。



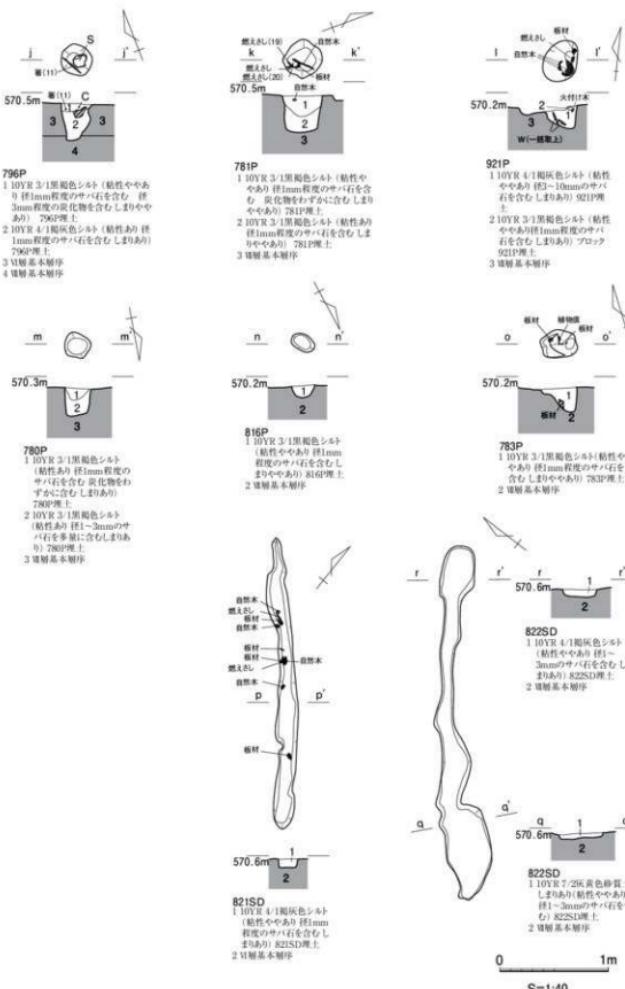
第22図 SH 1 遺構図



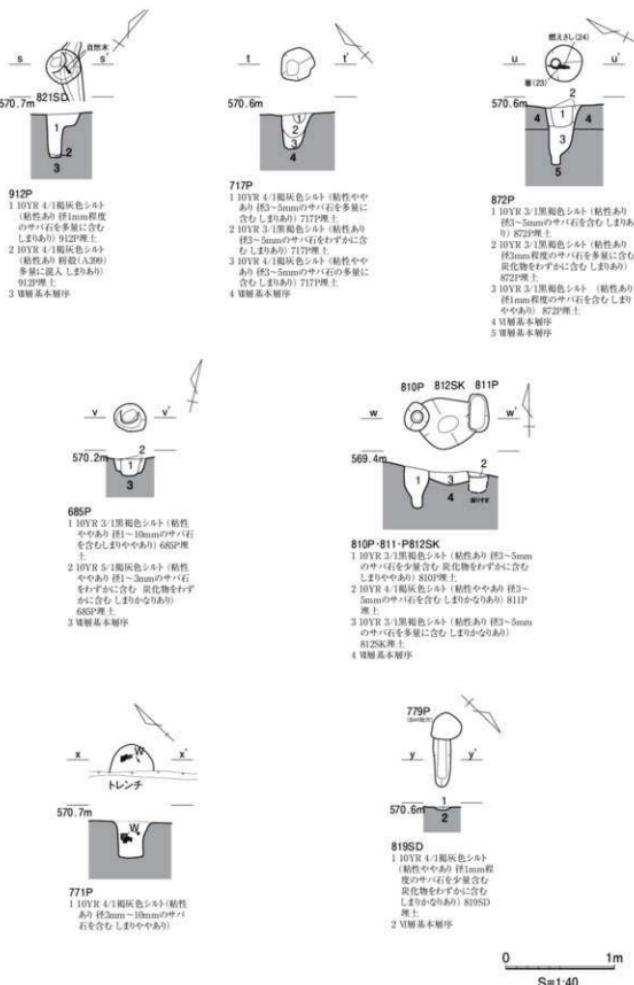
第23図 SH 2 + 3 遺構図



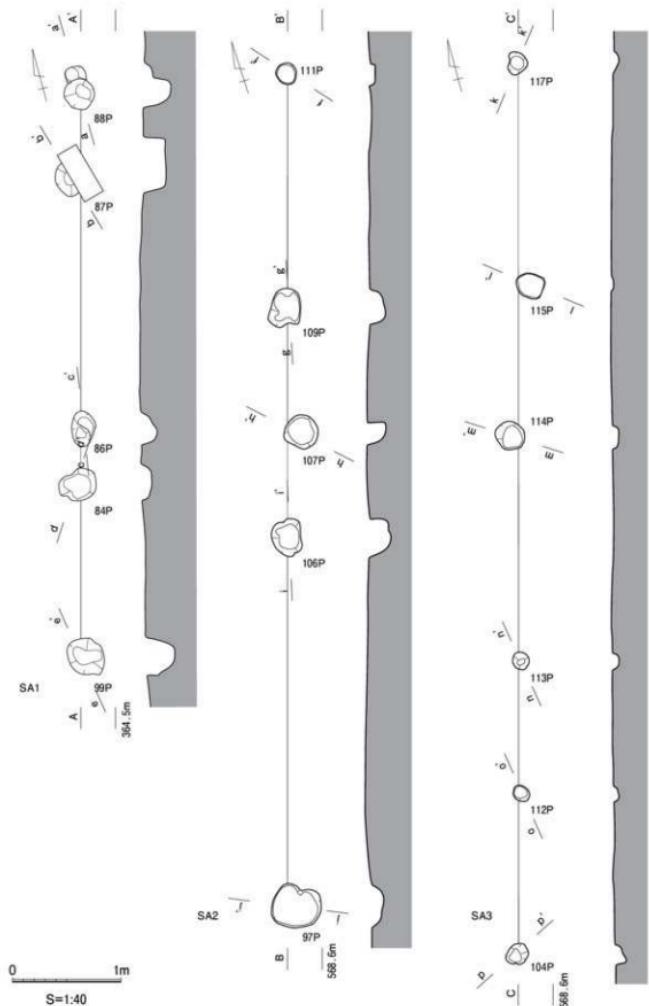
第24図 SH 2 関連遺構図 (1)



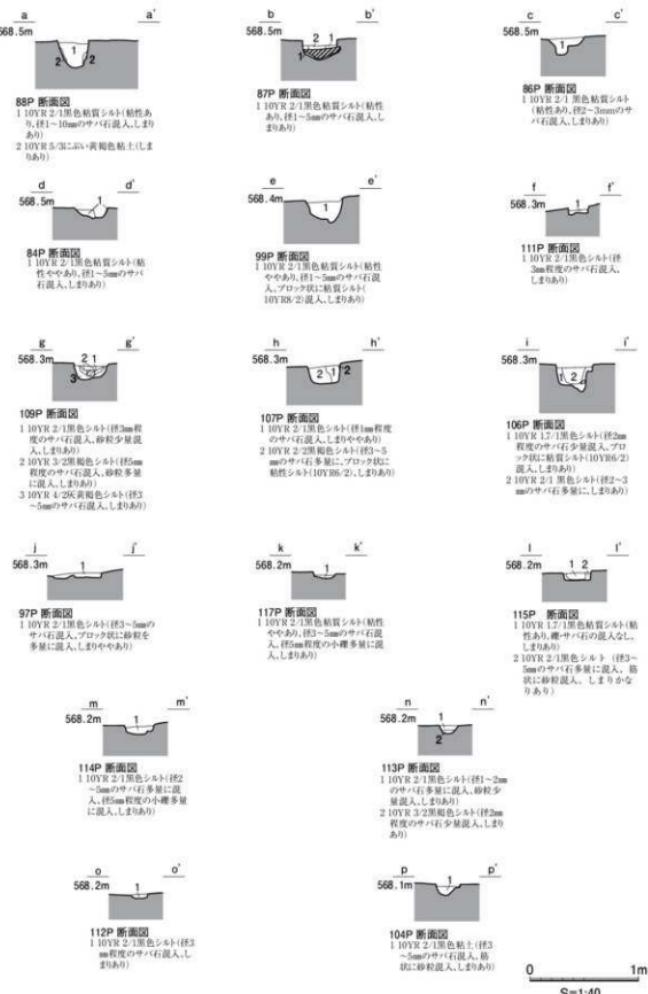
第25図 SH-2関連遺構図(2)



第26図 SH 3 間連遺構図



第27図 SA 1～3 遺構図



第28図 SA 1～3 間連遺構図

### (3) 溝跡 (SD)

#### 34SD (第29図・写真図版4)

**位置・検出状況** 調査区北部の41m NWで検出した。35SDとほぼ並行する。

**形状と規模** 長さ約6.5m、幅約0.9mである。57STと58STの間に位置する。主軸は小区画水田造構(ST)の長軸にはば直行する。畦畔上を掘り込むことから、57STと58STを結ぶ給排水用の溝と考えられる。溝の底面の標高から、南西から北東方向に流水があったと考えられる。

**出土遺物** 土師器91点(26・27・30)、須恵器1点、石製品2点が出土した。

**時期** 出土遺物から造構の所属時期は奈良時代から平安時代と考えられる。

#### 35SD (第29図・写真図版4)

**位置・検出状況** 調査区北部の37m SW、37m NW、38m NE他で検出した。53SDと接する。

**形状と規模** 長さ約53.2m、幅約1.0m、深さ約1.4mである。主軸は小区画水田造構(ST)の長軸にはば直行する。断面形は皿状を呈する。溝の底面の標高から、南西から北東方向への流水があったと考えられる。南西端から直線的に流れ、66STより東側は若干軸を東にずらし、直線的に流れ。北東端で途切れるが、148SDにつながる可能性がある。埋土の下層に砂層が堆積することから、一定量の水流があったと考えられる。溝の北東端には不整形な土坑(150SK)があり、砂粒を含んだ粘質土が堆積していた。35SDの流水をこの土坑に一時に溜められた可能性が考えられる。

**出土遺物** 弥生土器若しくは土師器7点、須恵器29点(31~33)、灰釉陶器4点(28・34・35・36)、山茶碗10点、古瀬戸陶器3点、近世陶器1点、木製品が45点(39)、金属製品3点が出土した。

**時期** 出土遺物から造構の所属時期は古墳時代から平安時代と考えられる。

#### 50SD (第29図)

**位置・検出状況** 調査区北部の40m E、40m NW、40m SWで検出した。52SDとほぼ並行する。

**形状と規模** 長さ約9.4m、幅約2.5m、深さ約2.1mである。主軸は小区画水田造構(ST)の長軸にはば直行する。断面形は皿状を呈する。溝の底面の標高から、南西から北東方向に流水があったと考えられる。埋土に砂粒を含む堆積が見られることから、一定量の水流があったと考えられる。

**出土遺物** 木製品1点が出土した。

**時期** 造構の所属時期は不明である。

#### 51SD (第29図)

**位置・検出状況** 調査区北部の40m E、40m S Eで検出した。53SDと接する。

**形状と規模** 長さ約6.8m、幅約1.5m、深さ約1.7mである。主軸は小区画水田造構(ST)の長軸にはば直行する。断面形は皿状を呈する。溝の底面の標高から、南西から北東方向に流水方向があつたと考えられるが、粘質土が堆積することから滲水していた可能性もある。

**出土遺物** 弥生土器若しくは土師器3点、須恵器4点、木製品が1点出土した。

**時期** 造構出土遺物は細片が多いため、造構の所属時期は不明である。

#### 53SD (第29図)

**位置・検出状況** 調査区北部の37m SW、38m SE、38m NE他で検出した。51SDと接する。

**形状と規模** 長さ約31.9m、幅約0.8m、深さ約1.1mである。主軸は小区画水田造構(ST)の長軸にはば直行する。断面形は浅い皿状を呈し、南西から北東方向に流水方向があつたと考えられる。南



西端から直線的に流れ、66S Tより東側は若干軸を東にずらし、直線的に流れる。埋土に砂質土が堆積することから、一定量の水流があったと考えられる。

**出土遺物** 弥生土器2点、須恵器2点、木製品2点が出土した。

**時期** 遺構出土遺物は細片が多いため、遺構の所属時期は不明である。

#### 148S D (第29図)

**位置・検出状況** 調査区北部の36ミSW、36ムNW、37ムNE他で検出した。

**形状と規模** 長さ約10.9m、幅約2.3m、深さ約2.1mである。断面形は皿状を呈し、南西から北東方向に直線的に流れる。埋土に粘質土が堆積することから、漏水していた可能性が考えられる。

**出土遺物** 須恵器3点(29)、土師器2点が出土した。

**時期** 出土遺物から遺構の所属時期は奈良時代から平安時代と考えられる。

#### (4) 水田遺構 (S T)

**位置・検出状況** 調査区北西部で検出した。畦畔は洪水砂層(V層中)で見え始め、VI層上面で検出した。畦畔の上部は区画整理により削平され、検出は困難であった。検出した区画は11区画である。

58S T・59S T・60S T・63S T・64S T・65S Tの南部分は調査時に排水溝を掘削したため一部消失していた。南西の区画から北東の区画に向かって比高差があり、地形は北東に向かって緩やかに傾斜する。洪水堆積土を除去すると、水田面で人の足跡と思われる痕跡を確認した。

**形状・規模** いずれも、長軸方位は谷地形に直行し、南西から北東に向かって規則的に並ぶ。平面形はいずれも不定形である。規模は第10表に示したとおりである。

**施設** 57S Tと58S T、61S Tと62S T、63S Tと64S T、63S Tと65S Tの間に畦畔を凹状に掘削して開けられた水口及び出口の尻水口(34S D)が確認した。基本的には田越しの給排水を行っていたと考えられる。

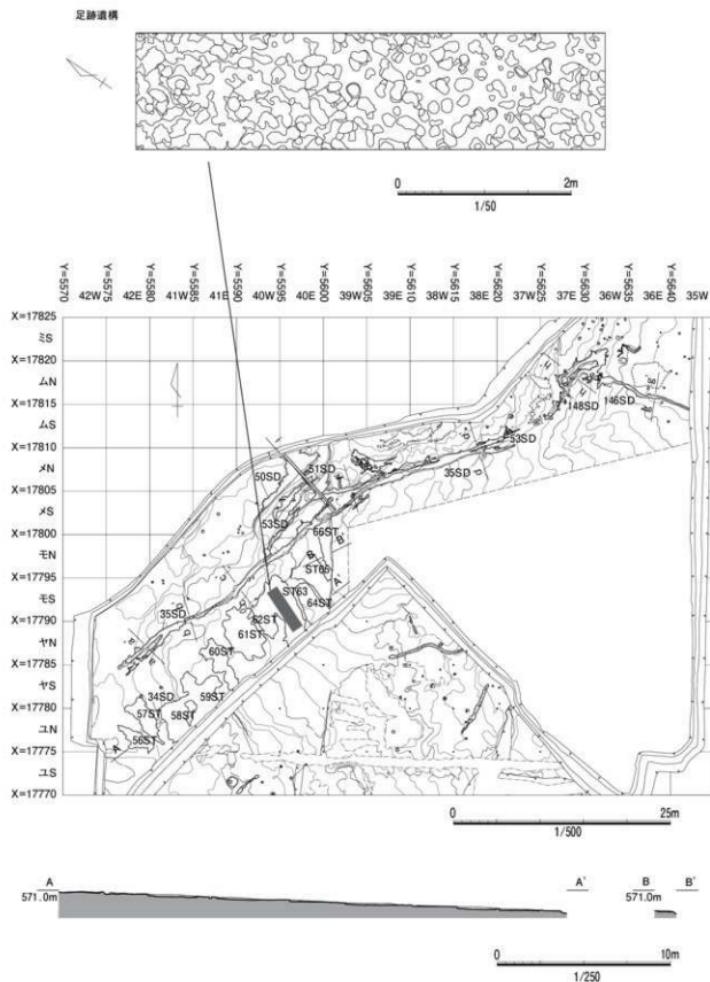
これらのS Tに沿うような形で検出した35S Dとの因果関係については、取排水溝や取排水口等の給排水施設は確認できず、不明である。

**出土遺物** 畦畔に伴う埋納遺物はなく、すべて埋土中から出土した。56S Tから須恵器4点、58S Tから須恵器16点(37)、59S Tから山茶碗1点、61S Tから木製品1点、63S T~65S Tから弥生土器若しくは土師器が各1点出土した。

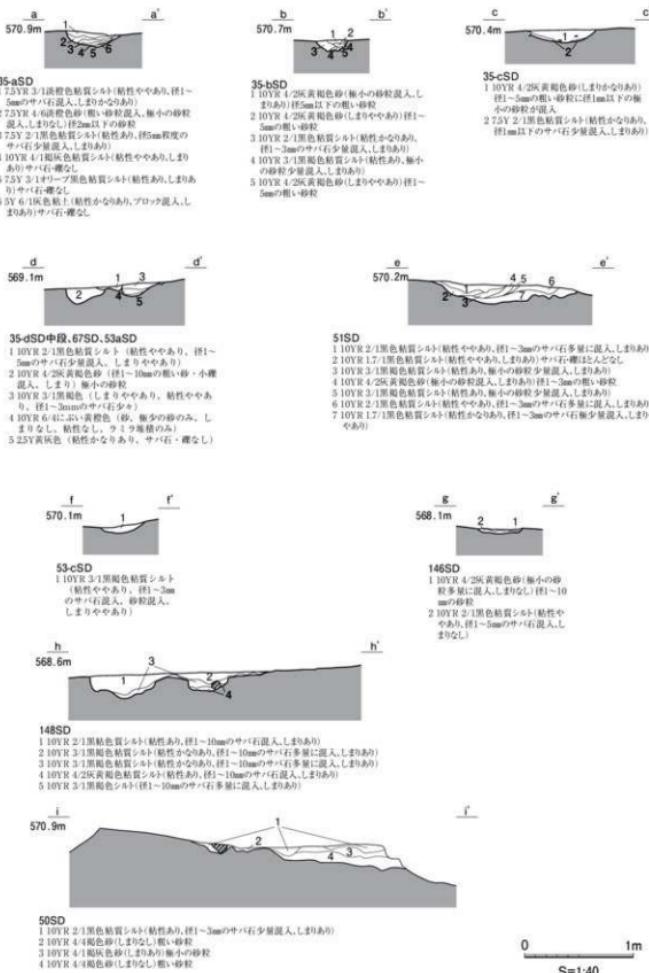
**時期** 畦畔から出土した土器がないが、58S T及び34S Dの出土遺物から所属時期は奈良時代から平安時代と考えられる。

第10表 小区画水田観察表

遺構番号	平面形状	面積	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	水口	主軸
56ST	不定形	9.7	4.6	2.1	0.2	無し	N50°W
57ST	不定形	13.9	5.8	2.4	0.4	無し	N45°W
58ST	不定形	12.7	4.1	3.1	0.6	有り	N43°W
59ST	不定形	20.3	5.2	3.9	0.6	有り	N43°W
60ST	不定形	15.5	6.2	2.5	0.4	無し	N43°W
61ST	不定形	24.7	6.5	3.8	0.5	無し	N44°W
62ST	不定形	8.0	4.0	2.0	0.2	有り	N40°W
63ST	不定形	20	7.4	2.7	0.7	有り	N42°W
64ST	不定形	12.9	4.6	2.8	0.4	有り	N41°W
65ST	不定形	20.9	5.8	3.6	0.1	有り	N40°W
66ST	不定形	6.2	3.9	1.6	0.3	無し	N41°W



第29図 区間水田・足跡遺構・溝跡遺構図



第30図 溝跡構造関連図

### (5) 杭列跡 (SS)

#### SS 1 (第31図・写真図版4)

**位置・検出状況** 調査区北部で検出した。

**形状と規模** 直立杭13本で構成する。杭列は長さ約6.0mではば直線上に並ぶ。杭列の北端は調査区外となるため、北側に延びる可能性がある。主軸方位はN80°Eであり、等高線に沿うかたちとなる。

**杭の形状** 杭の分類でII-1類が11本(42~47)、II-2類が2本(41)である。

**時期** 遺構の所属時期は不明である。

#### SS 2 (第31図・写真図版4)

**位置・検出状況** 調査区北部の55SDで検出した。

**形状と規模** 直立杭6本で構成する。杭列は長さ約6.1mではば直線上に並ぶ。杭列の北西端は調査区外となるため、北西側に延びる可能性がある。主軸方位はN61°Eであり、溝の主軸とはば同じになる。溝の護岸施設の可能性もあるが、横木・縦木・斜木等の構造材は確認できなかった。

**杭の形状** 杭の分類でII-1類が4本、II-4類が1本、III類が1本である。

**時期** 遺構の所属時期は不明である。

#### SS 3 (第31図・写真図版4)

**位置・検出状況** 調査区北部の197SDで検出した。

**形状と規模** 直立杭7本で構成する。杭列は長さ約3.0mではば直線上に並ぶ。主軸方位はN61°Eであり、197SDの主軸とはば同じである。溝の護岸施設の可能性もあるが、横木・縦木・斜木等の構造材は確認できなかった。

**杭の形状** 杭の分類でII-1類が5本、II-2類が2本である。

**時期** 197SDの出土遺物から遺構の所属時期は古墳時代から古代と考えられる。

#### SS 4 (第31図)

**位置・検出状況** 調査区南部で検出した。

**形状と規模** 直立杭7本で構成する。杭列は長さ約6.5mではば直線上に並ぶ。主軸方位はN90°Eである。

**杭の形状** 杭の分類でI類が5本、II-1類が1本、II-4類が1本である。

**時期** 調査前の水田の畦畔と同位置となることから、近代以降の杭列の可能性が高い。

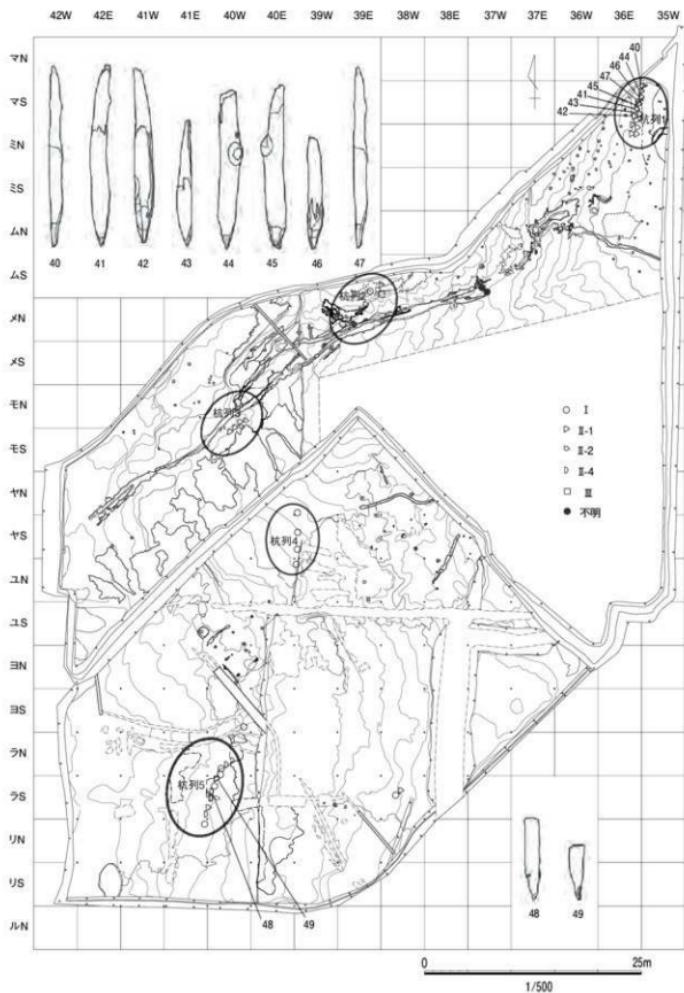
#### SS 5 (第31図)

**位置・検出状況** 調査区北部で検出した。

**形状と規模** 直立杭10本で構成する。杭列は長さ約7.7mではば直線上に並ぶ。主軸方位は、N69°Eである。

**杭の形状** 杭の基礎は切断されている。杭の分類でI類が2本、II-1類が3本(49)、II-4類が5本(48)である。

**時期** 検出面はⅢ層上層であるが、上層がⅡ層となる。検出層位により時期を確定できないため、遺構の所属時期は不明である。



第31図 杭列の分布状況図

## 2 第1調査面の遺構内出土遺物

### S H 2 (第34図-1~22)

1~10は724Pから出土した。1は山茶碗の片口鉢で荒肌手で体部が直線的に開き、端部尖ることから古瀬戸前Ⅰ期（5型式）に比定する。体部下半は欠損し、内面全体に煤が付着する。2~10は箸状木製品である。4~7は木片を小割りした後、両端を細くおさめる。10は先を平坦に整え、末端を斜めに切断する。11~15は796Pから出土した。11~13・15は箸状木製品で木片を小割りした後、両端を細くおさめる。14は燃えさして先端の他に側刃が炭化していた。16~20は781Pから出土した。16・17は箸状木製品で木片を小割りした後に棒状に整える。18~20は燃えさしてある。18は木片を小割りしたもので、箸状木製品の可能性がある。21・22は780P出土の箸状木製品で、木片を小割りした後に棒状に整える。22は端で収束するものの平坦になることから末端部分と判断した。

### S H 3 (第34図-23~25)

23~25は872P出土の木製品である。23・25は箸状木製品で木片を小割りした後に棒状に整える。24は燃えさしてある。先端にタール状のものが付着する。

### 34 S D (第34図-26・27・30)

26・27・30は土師器の甕である。いずれも胎土中に3mm程の砂粒を多く含む。26は頸部から口縁部分にかけて外反する。内外面とも摩耗し調整痕が不明瞭であるが、内面の口縁部付近に僅かに横ハケが認められる。27は外縁の口縁部付近に縱ハケ、内縁の口縁部から頸部にかけて横ハケが認められる。30は外縁の胸部に縱ハケ、内縁に指押さえが認められる。26と接合しないが、胎土や器面の厚さが類似し出土位置も近接することから、同一個体の可能性がある。

### 35 S D (第34図-28・31~34・35・36・39)

31~34は須恵器である。31は壺で頸部から口縁部にかけて強く外反する。32は甕の底部から体部にかけての破片で外面に煤が付着する。内面には、粘土積み痕が認められる。33は長頸壺の頸部で口縁部にかけてやや外反する。外面全体に自然釉が認められる。28・34・35・36は灰釉陶器である。28は壺の口縁部破片、34は瓶の底部から体部にかけての破片である。35・36は碗である。35の体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。高台の内面下端は直線的である。底部外面は回転糸切り痕の高台に沿ってナデ消す。焼成はやや悪く、軟質である。折戸53号窯式に比定される。36は高台外面に稜を作る。黒籠90号窯式に比定される。39は漆器の体部片で外面に黒色漆が塗られている。

### 148 S D (第34図-29)

29は須恵器の杯身である。底部と体部の境が明瞭でなく、体部の先端部に蓋を受ける立ち上がり部分が認められる。外面底部下方に自然釉が認められる。

### 58 S T (第34図-37)

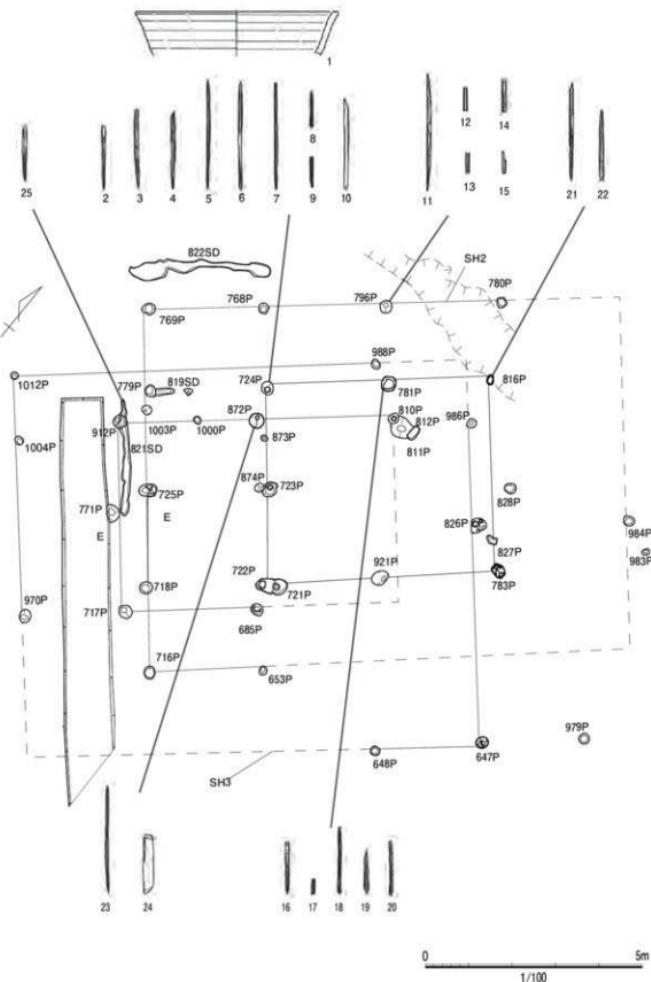
37は須恵器の無台の杯で、やや厚めの底部から直線的に開く。奈良～平安時代のものと考えられる。

### 69 S K (第34図-38)

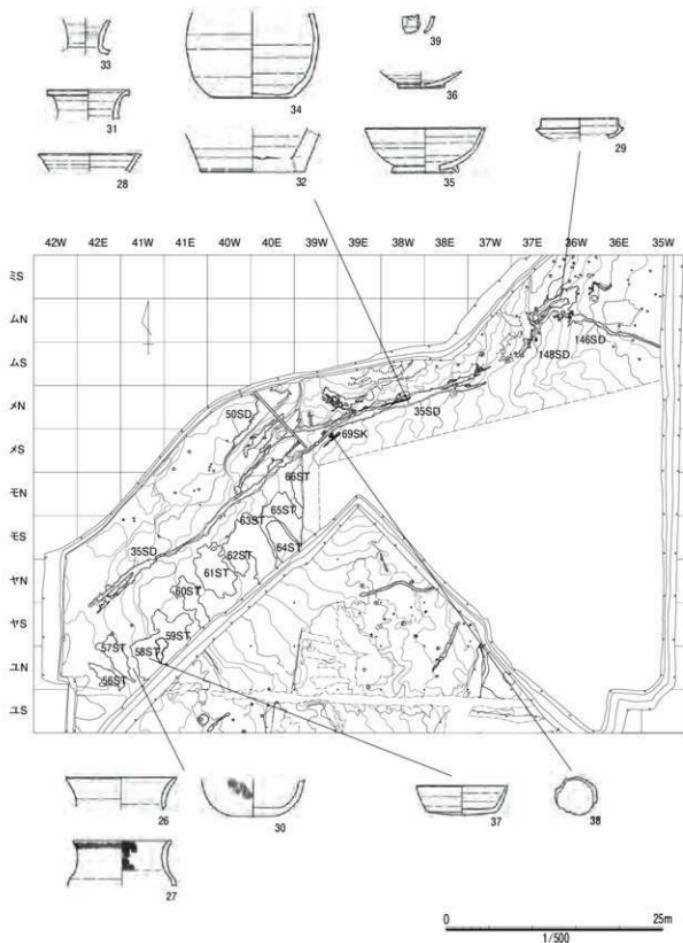
38は木製品である。曲げ物の底板の可能性がある。

### S S 1~5 (第35図-40~49)

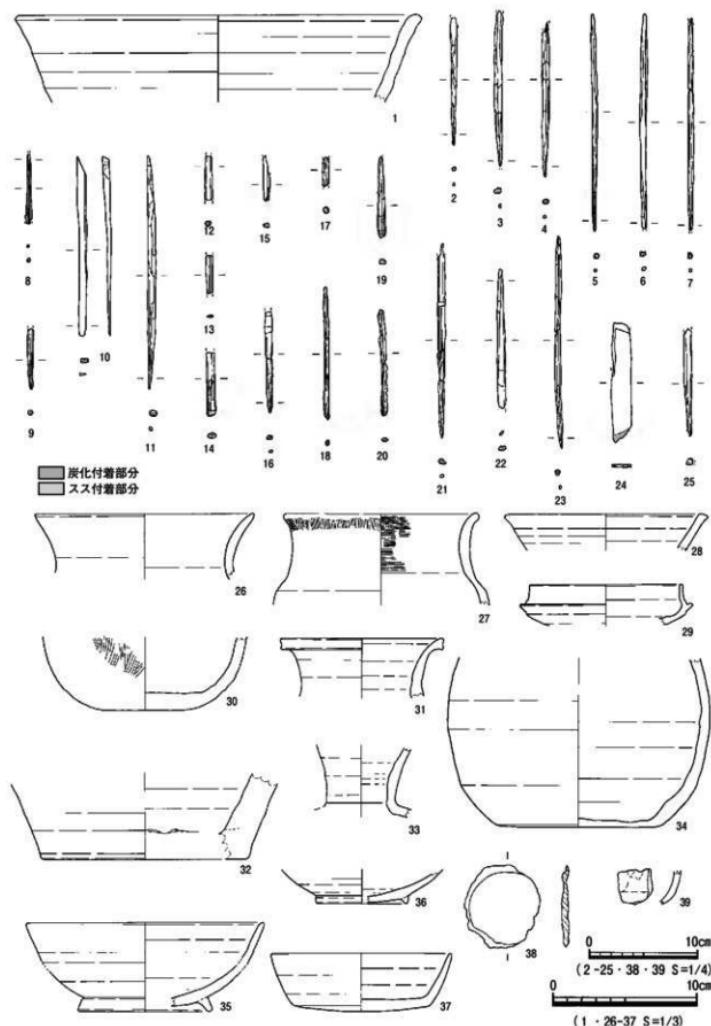
40~49は杭状の木製品である。40~47はミカン割り材を用い、主に先端を側刃と樹皮を残す面から長く整える。48・49は半割材を用い、主に先端を側刃から短く整える。



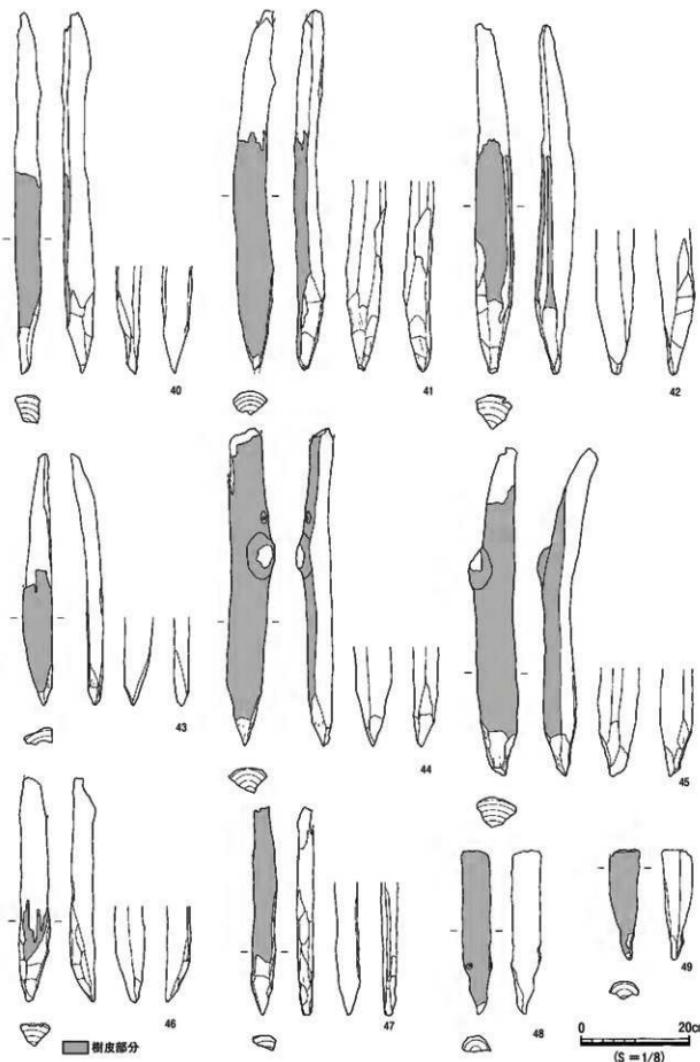
第32図 SH 2・3の遺物出土状況



第33図 SD の遺物出土状況図



第34図 第1調査面の遺構内出土遺物（1）



第35図 第1調査面の遺構内出土遺物（2）

## 第4節 第2調査面の遺構と遺物

### 1 検出した遺構

第2調査面（Ⅶ層上面）で検出した遺構のうち、堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟（SH5～8）を報告する。SH7・8は、整理作業時に掘立柱建物跡（SH1～6）の形状・規模と比較し、これを範型とした柱穴配置をもつ土坑群の確認を行った際に四面庇をもつ掘立柱建物跡（SH4・5）と規模や形状が類似し、また柱穴配置が規則的に配列されていることを確認した。通常は、すべての柱穴配置をもって認定するが、一部の欠落する柱穴がある場合も柱穴配置をもって掘立柱建物跡とした。新たに掘立柱建物と認定したSH7・8の柱穴については断面図がないため、平面図のみ図示する。

#### （1）堅穴住居跡（SB1）

##### SB1（第36図、写真図版5）

**位置・検出状況** 広調査区南部の38ラNE、38ラNW、38ラSWで検出した。

**形状と規模** 隣丸方形の平面プランを呈する。

**柱穴の状況** 10基のピットを確認した。住居跡内のピットはすべて床面検出時に確認しているが、住居跡内埋土の堆積が希薄な部分もあり、一部、上面から掘り込まれた可能性もある。主柱穴は、2基（706P・701P）確認したが北側の主柱穴は確認できなかった。704Pは炉（705S F）に伴う。その他は性格を特定できるピットはない。

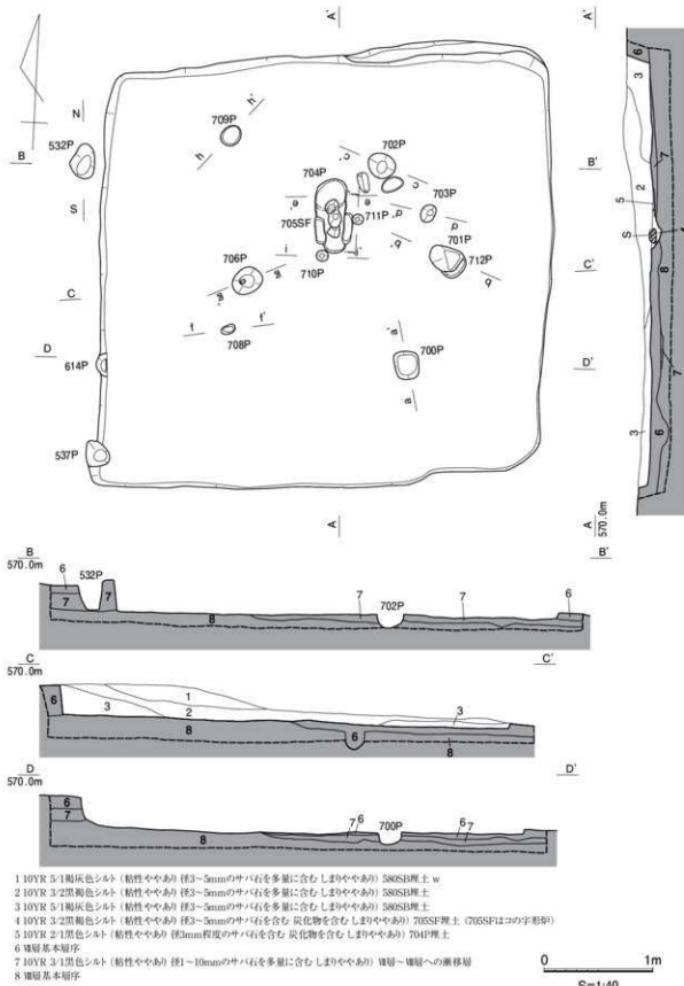
**床** 床面に貼床を敷設した状況は確認できなかった。

**炉** コの字状石囲炉（705S F）は、住居跡の中央や北寄りで確認した。元米コの字状石囲い炉は3石を配置するが、確認した炉石は2個で、西側の石は長さ25cm、幅10cmで、東側の石は長さ30cm、幅10cmであった。炉石の大きさと2石の配置状況から、コの字状石囲い炉の1石が動いてしまったものと考えられる。また、炉東側の床面直上で炉石と思われる長さ20cm、幅10cmの石を確認している。この石は、原位置を保つ2石の間にちょうど収まる大きさであり、炉南側に置かれていた炉石が動いたものと推測される。この石と原位置を保つ2個の石と合わせて、南側が閉じて北側に開口するコの字状石囲い炉と考えられる。炉は炉石内部が土坑状になっており、中央部がやや深く掘り込まれている。掘り込みには顯著ではないが被熱が確認できる。炉は、一旦埋められた後、土坑状の埋土を切る形で、炉石北側に新たに浅い掘り込みがつくられ（704P）、炉の改変が確認できる。確認した炉石は改変時のものと考えられる。

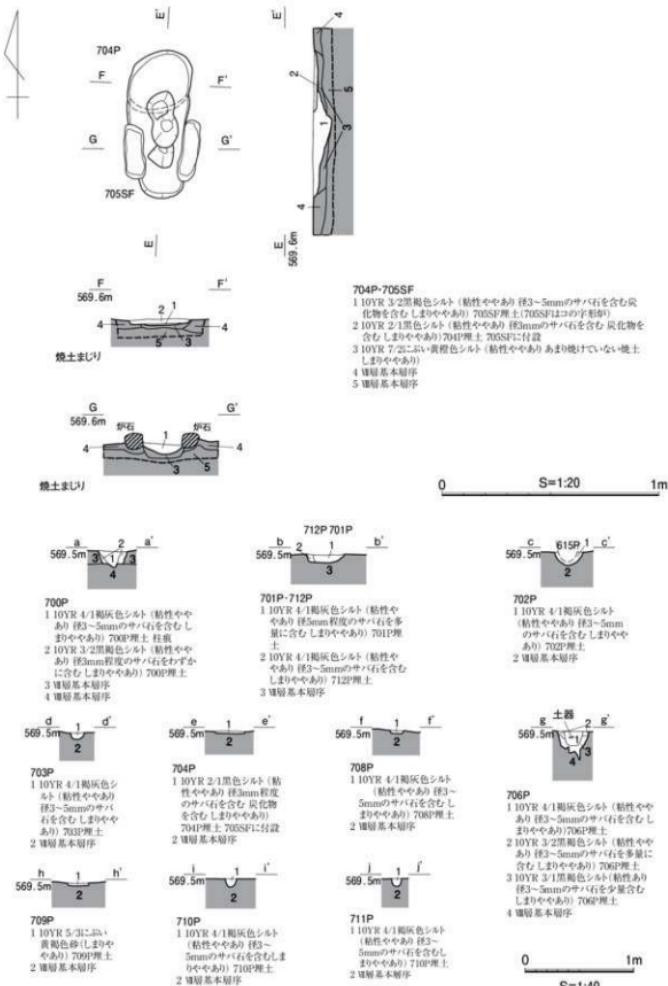
**壁溝** 確認できなかった。

**出土遺物** 弥生土器は高環・器台12点（50）、甕83点（51・52～54）が出土した。このうち、個体識別できたのは、高環・器台2個体、甕3個体の計5個体である。この他、床面直上で石皿1点（55）が出土した。

**時期** 出土土器から遺構の所属時期は弥生時代後期と考えられる。



第36図 SB 1 遺構図



第37図 SB 1 間連遺構図

## (2) 挖立柱建物跡 (S H)

### S H 4 (第38図・写真図版5)

**位置・検出状況** 調査区北部の35メ NW、36メ S E、36メ N E他で検出した。

**形状と規模** 平面形は長方形である。四面庇をもち、庇部分を含めると、4間(9.0m)×4間(11.2m)の掘立柱建物跡となる。柱間の平均は、外側が梁行方向2.3m、桁行方向2.8m、内側が梁行方向2.3m、桁行方向2.9mとなる。庇部分の面積は100.8m<sup>2</sup>、身舎部分の面積26.7m<sup>2</sup>である。建物跡の主軸は南西-北東方向にとる。

**柱穴の状況** 柱穴は22基(267P・178P・183P・201P・177P・189P・195P・196P・191P・192P・205P・212P・199P・262P・264P・222P・224P・210P・203P・211P・228P・226P)で構成される。北西角の庇部分にあたる2基の柱穴は確認できなかった。確認できた22基の柱穴のうち177P・189P・264P・267Pを除いて、埋土中に0.2~0.3m規模の比較的大きな角礫を伴う。柱穴状の堆積がないことや角礫が埋土の上面で検出されることから、廃棄の際に意図的に礫を入れ、埋め戻した可能性が考えられる。S H 4の柱穴である183Pが185Pを切る。185PがS H 5の柱穴である184Pに切られることから、S H 4はS H 5より古い造構と考えられる。

**出土遺物** 177Pから木製品1点、191Pから山茶碗1点、196Pから弥生土器若しくは土師器1点、199Pから木製品2点、203Pから木製品1点、211Pから灰釉陶器1点(58)、212Pから灰釉陶器1点(57)・山茶碗1点、224Pから木製品1点、226Pから灰釉陶器1点・木製品6点、228Pから灰釉陶器1点・木製品3点が出土した。

**時期** 出土土器及びS H 5の切り合い関係から造構の所属時期はS H 5より古い造構と考える。211Pと212Pは折戸53号窯の灰釉陶器が各1点ずつ出土しているが、埋土の上層からの出土であることや土器が細片であることから混入したものと判断した。

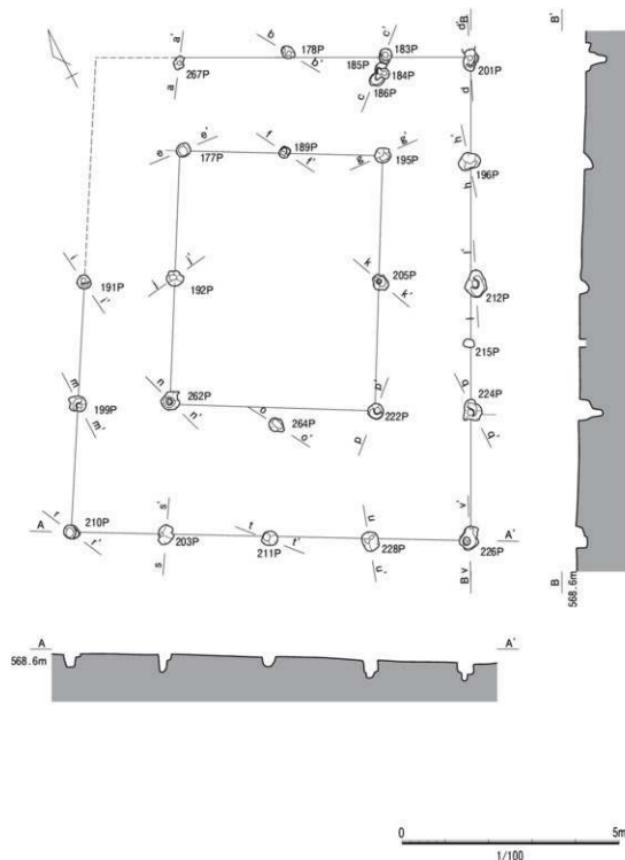
### S H 5 (第41図・写真図版5)

**位置・検出状況** 調査区北部の35メ SW、35メ NW、35メ S W他で検出した。

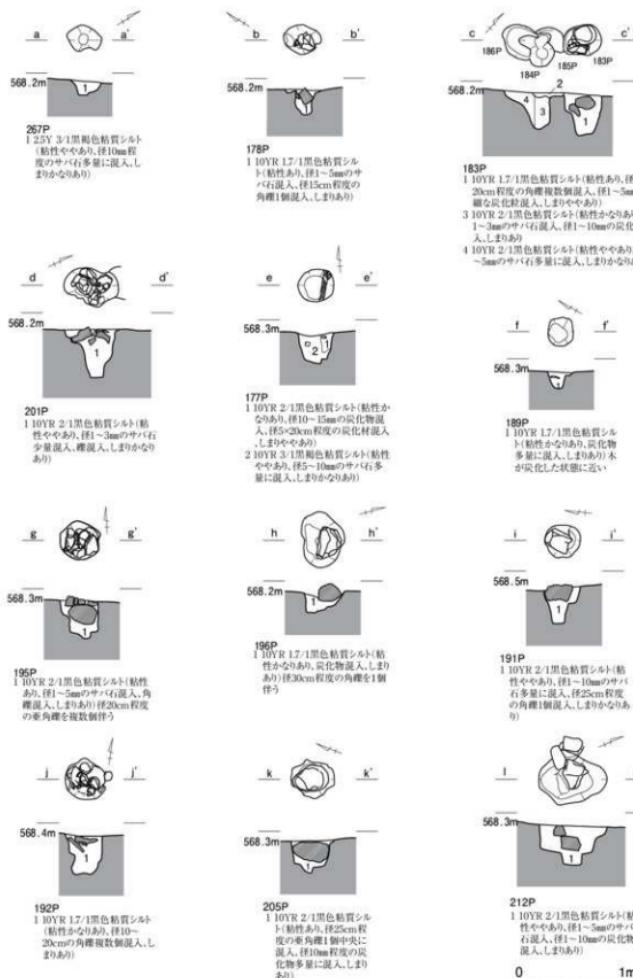
**形状と規模** 平面形は長方形である。四面庇をもつ4間(9.7m)×4間(11.0m)の掘立柱建物跡である。柱間の平均は、外側が梁行方向2.4m、桁行方向2.8m、内側が梁行方向2.4m、桁行方向3.0mとなる。庇部分の面積106.70m<sup>2</sup>、身舎部分の面積28.32m<sup>2</sup>で、建物跡の主軸は南東-北西方向にとる。形状はS H 4よりやや大きく、建物の主軸方向は異なる。前述のとおり、S H 4との切り合い関係でS H 4より新しい造構であることと、S H 4は埋め戻しの行為が想定できることから、S H 5はS H 4を建て替えた建物の可能性がある。

**柱穴の状況** 柱穴は22基(175P・176P・263P・180P・179P・193P・190P・189P・186P・182P・208P・200P・196P・206P・221P・223P・214P・216P・227P・225P・219P・218P)で構成される。南東角の庇部分にあたる2基の柱穴は、調査時の排水溝により消失したと考えられる。

**出土遺物** 190Pから山茶碗1点・木製品1点(59)・金属製品1点、196Pから弥生土器若しくは土師器1点、200Pから山茶碗1点・木製品1点(60)、216Pから木製品2点、218Pから木製品2点(63・65)、221Pから近世陶器1点・木製品1点(61)、225Pから木製品3点、227Pから木製品3点(62)、228Pから灰釉陶器1点・木製品3点(64)が出土した。



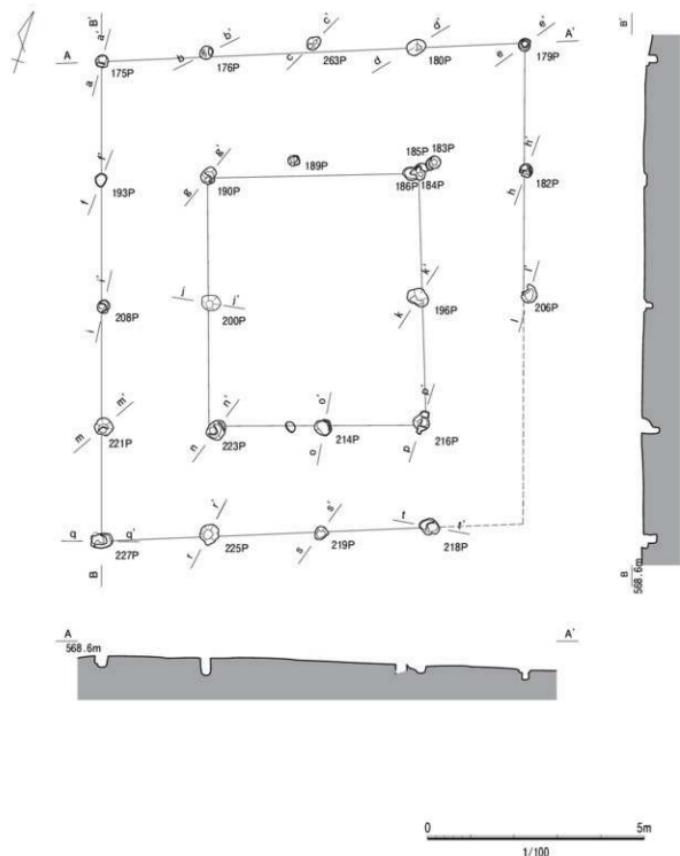
第38図 SH 4 遺構図



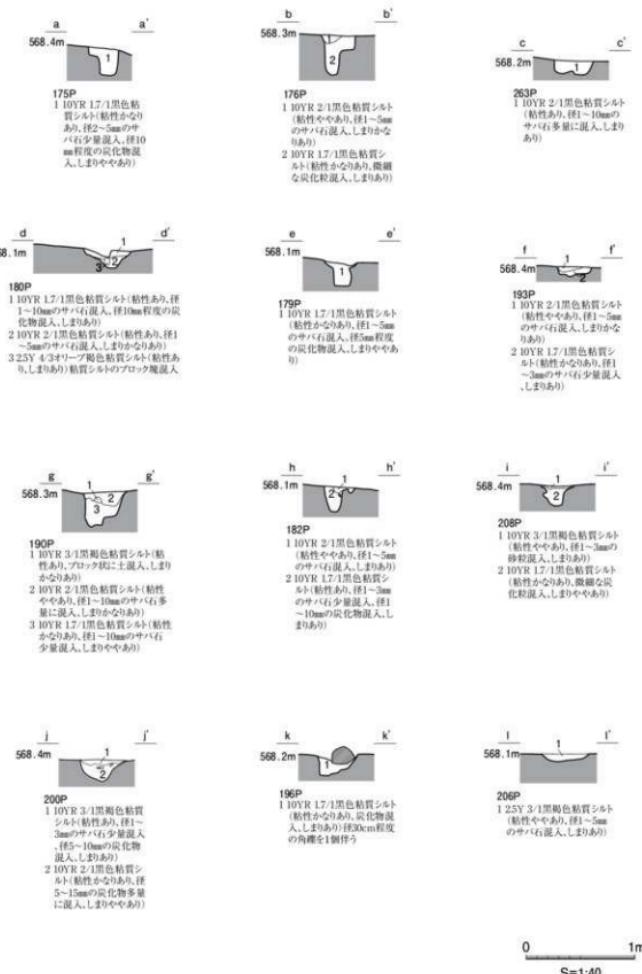
第39図 SH 4 関連遺構図 (1)



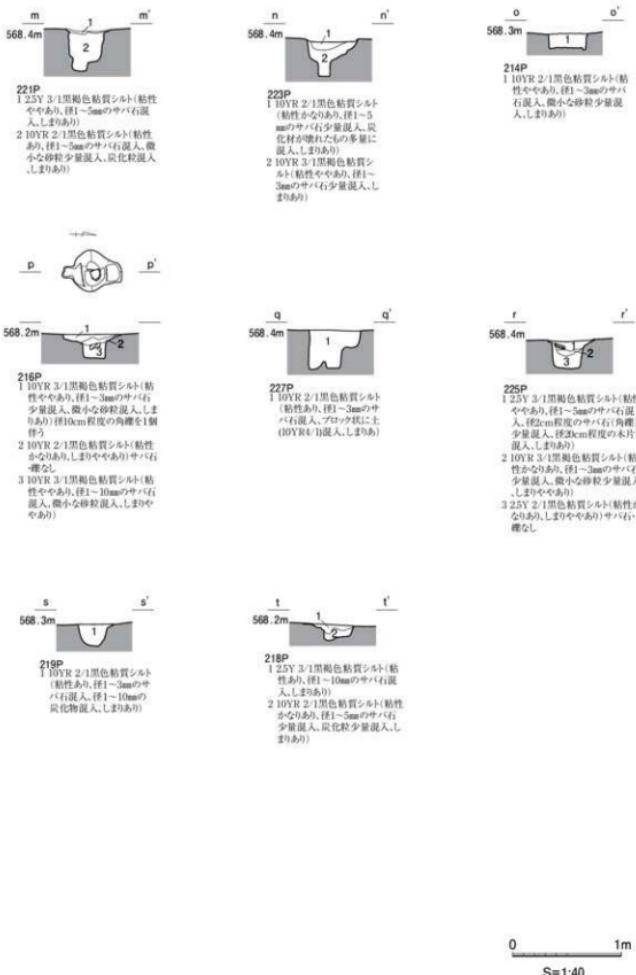
第40図 SH 4関連遺構図 (2)



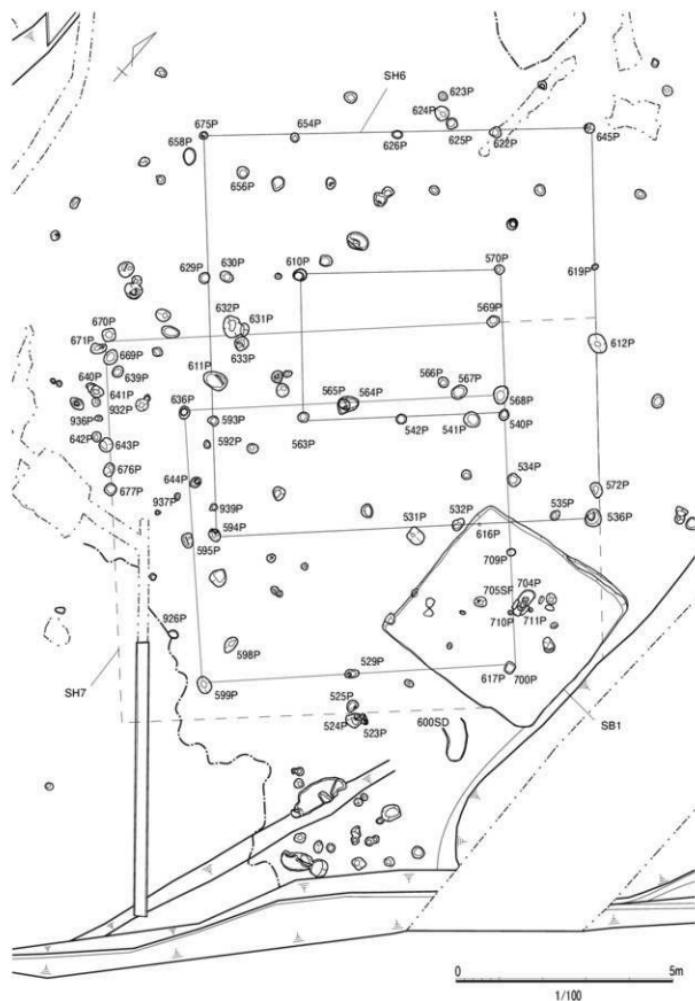
第41図 SH 5 造構図



第42図 SH 5関連遺構図(1)



第42図 SH 5 関連造構図 (1)



第44図 振立柱建物跡 (SH 6・7)



**時期** 出土土器及びSH4との切り合い関係から遺構の所属時期は中世前期（12世紀後半から13世紀前半）と考えられる。

#### SH6（第44図）

**位置・検出状況** 調査区北部の38ラNW、39ヨNE、39ヨSE他で検出した。

**形状と規模** 平面形は長方形である。四面庇をもち、庇部分を含めると、3間（9.0m）×4間（9.2m）の掘立柱建物跡となる。柱間の平均は、外側が梁行方向3.0m、桁行方向2.3m、内側が梁行方向3.3m、桁行方向2.3mとなる。庇部分の面積82.8m<sup>2</sup>、身舎部分の面積15.2m<sup>2</sup>で、SH2、SH3、SH7と同一の北西-南東方向に建物跡の主軸方向をとる。

**柱穴の状況** 柱穴は15基（675P・654P・626P・622P・645P・629P・610P・570P・619P・593P・563P・542P・540P・594P・536P）で構成される。庇部分にあたる1基の柱穴は確認できなかつた。SH6の柱穴の埋土は15基中13基が単層であり、柱穴状の堆積が認められない。一方、SH7の柱穴の埋土は13基中7基が単層であり、柱穴状の堆積も認められる。SH6とSH7は建物の主軸方向や位置がほぼ同じであるためSH6を埋め戻し、SH7を建て替えた可能性がある。

**出土遺物** 619Pから弥生土器若しくは土師器1点、536Pから弥生土器若しくは土師器2点が出土した。

**時期** 柱穴内埋土の堆積状況の比較からSH7より古い遺構と考える。619Pと536Pから弥生土器若しくは土師器に分類される遺物が出土しているが、摩耗が激しいことや土器が細片であることから混入したものと判断した。

#### SH7（第44図）

**位置・検出状況** 調査区北部の38ヨSW、38ラNW、38ラSW他で検出した。

**形状と規模** 平面形は長方形である。四面庇をもつ推定4間（8.9m）×4間（11.5m）の掘立柱建物跡である。柱間の平均は、外側が推定で梁行方向2.2m、桁行方向2.9m、内側が梁行方向3.2m、桁行方向3.7mとなる。庇部分の面積102.4m<sup>2</sup>、身舎部分の面積46.0m<sup>2</sup>で、SH2、SH3、SH6と同一の北西-南東方向に軸をとる。形状はSH6よりやや大きい。庇部分の南東側は北西側に比べ、身舎との間隔が狭い。南東側の柱穴は1基のみの検出であるが、524Pが身舎部分の柱穴である565P・529Pと一直線上になることや梁行の柱間が671Pと643P間の2.2mと想定した場合、ほぼ南東側の庇の桁を想定した直線上に位置することからSH7の柱穴に含めた。

**柱穴の状況** 柱穴は13基（671P・633P・569P・643P・636P・564P・568P・595P・572P・599P・529P・700P・524P）で構成される。

**出土遺物** なし。

**時期** SH6とSH7は遺構の切り合い関係はないが、SH6とSH7の柱穴内埋土の堆積状況の比較からSH6は埋め戻しの行為が想定でき、SH7はSH6を建て替えた建物の可能性がある。

SH6より新しい遺構と考える。

## 2 第2調査面の遺構出土遺物

#### SB1（第47図-50～55）

50～54は、弥生土器である。50は器台で脚部外面にミガキ調整の痕跡が残り、上下に透かし穴が3組確認できる。形状・調整から弥生時代後期の山中式に併行するものと考えられる。55は石皿である。



大きく破損したもので、平坦な面の広い範囲に磨面が観察できる。52は甕の体部で内外面に板ナデ調整が施される。51は甕の口縁部で器厚は8mmと厚い。胎土中に赤色粒を多く含む。口縁部は直線的に立ち上がり、端部付近で外反する。外面に櫛描文を残す。法仏式の可能性がある。53は甕の体部で、外面にミガキ調整が施される。能登型甕の可能性がある。54は甕で口縁部を外面に折り返し、端部を肥厚させる特徴から、在地の横羽状文の甕の可能性がある。

#### S H 4 (第47図-57・58)

57は212P、58は211Pの埋土から出土した灰釉陶器の碗である。高台は低く、底部外面は回転糸切り痕を高台に沿ってナデ消す。高台外面に僅かに稜が認められることから折戸53号窯式と考える。

#### S H 5 (第47図-56・59~65)

56は190Pの埋土から出土した山茶碗の小皿である。無高台で底部は厚手となる。南部系5型式に比定される。59は190Pの埋土から出土した燃えさしてある。60は200Pから出土した用途不明の板状の木製品で上辺を焦がしながら丸く成形する。61は221Pの埋土から出土した用途不明の板状の木製品で2箇所に方形と思われる孔を開ける。62は227P、63は218P、64は228Pの埋土から出土した。いずれも木片を小割りした燃えさしてある。65は218の埋土から出土した下駄で板状の木材に緒孔と思われる孔を2箇所開ける。歯裏が台と同じ幅を持つ。

#### 197 S D (第48図-67・68・73)

67は土師器の甕である。底部は尖底で胴部内外面にハケ目が明瞭に認められる。68は須恵器の有蓋の高环である。环身の可能性もある。胎土は緻密で焼成も良好で、底部外面を回転ヘラ削りする。端部は僅かに四面をなす。陶邑窯編年の1型式4・5段階に比定される。73はスクレイバーである。縦長剥片の側面を素材とし打面の稜上に連続的な剥離を曲線的に施す。

#### 277 S D (第48図-75)

75は打製石斧である。両面に原縫面を残す。薄手の河原縫を素材とし両側縫が基部に向かって収束するように両側縫とほぼ平行に成形する。刃部は直線的で刃部に直交する線状痕を背面に残す。

#### 782 S D (第48図-71)

71は深鉢の底部である。器表面が摩耗しているため、調整痕や文様が不明瞭であるが、胎土中に砂礫を多く含み、器厚が厚いことから繩文土器とした。弥生土器の可能性もある。

#### 900 S D (第48図-69)

69は須恵器の有台の杯身である。

#### 1020 S D (第48図-72)

72はスクレイバーである。原縫面を打面とする横長剥片の背面側から曲線的に刃部調整する。

#### 198 S K (第48図-74)

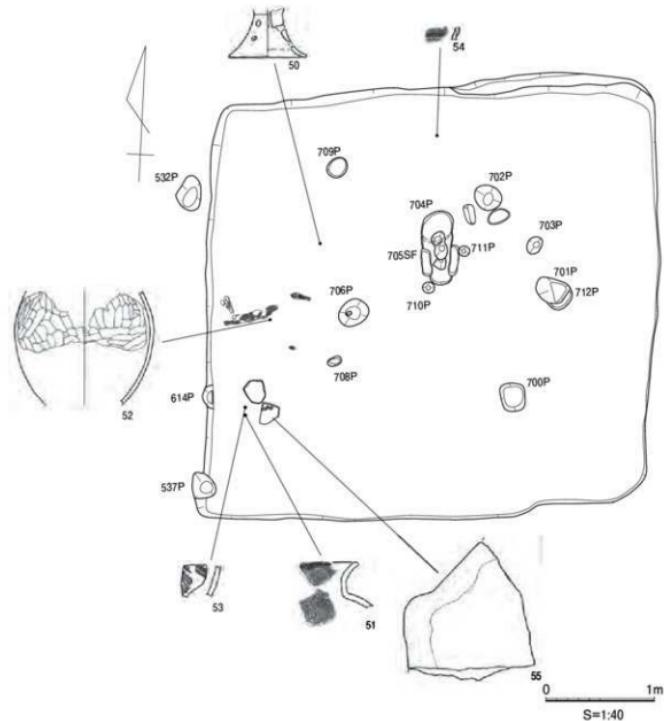
74はスクレイバーである。表裏がポジティブな剥離面を有する厚手の横長剥片で、上辺に階段状剥離、下辺に潰れ状の剥離を残す。両側辺に切断状の剥離面を残す。

#### 162 P (第48図-66)

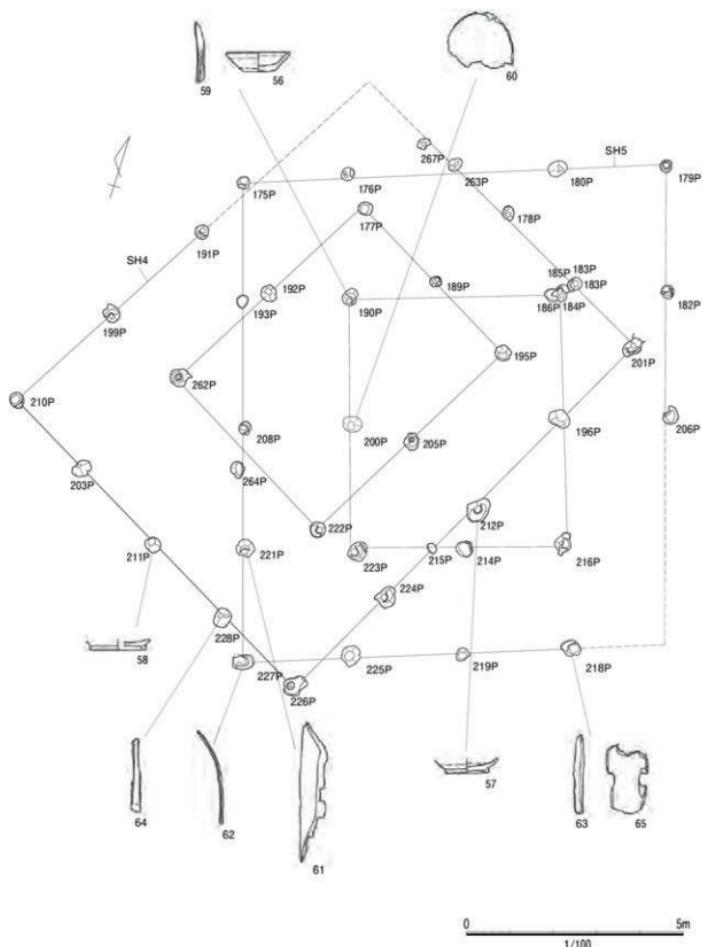
66は須恵器の甕である。体部外面にタタキ調整を施す。

#### 713 P (第48図-70)

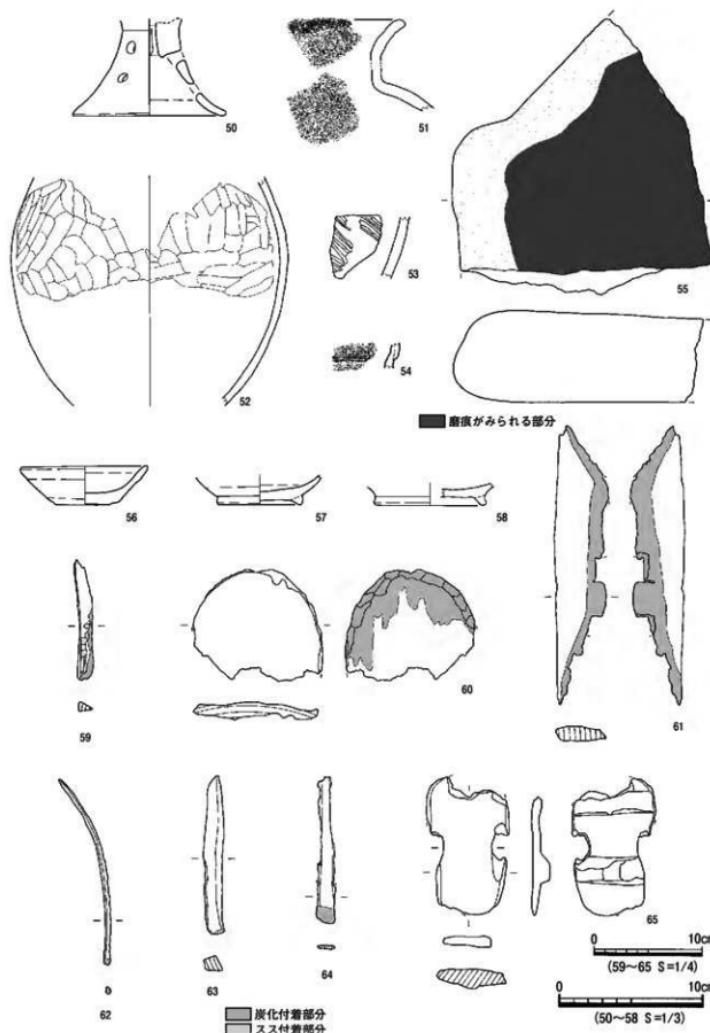
70は輪の羽口の先端部である。粘土製で外面に融解した粘土の付着が顕著である。



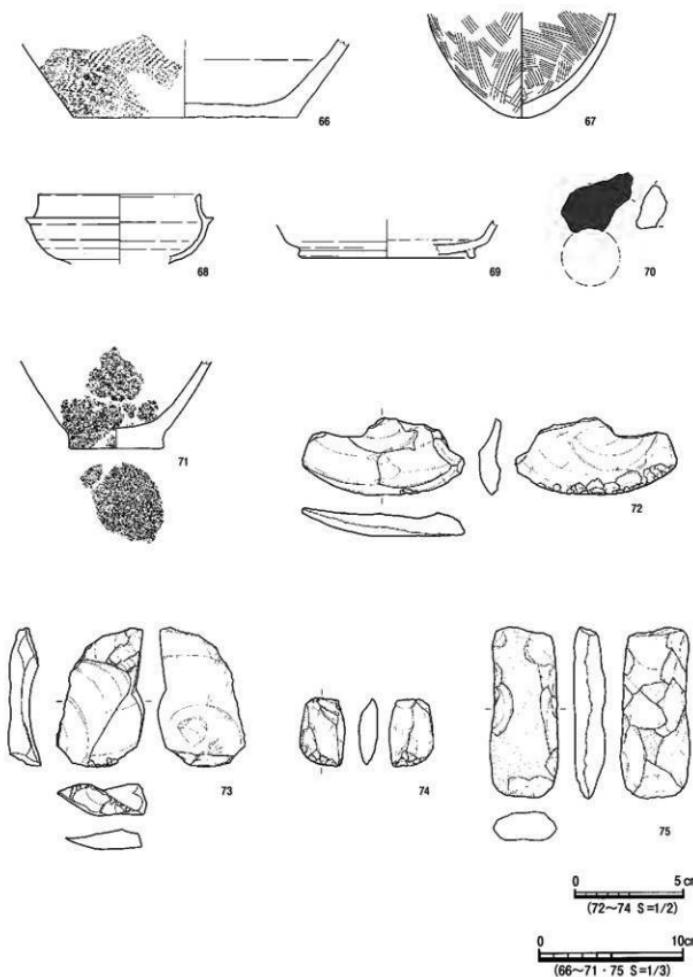
第45図 SB 1 の遺物出土状況



第46図 SH 4・5 の遺物出土状況



第47図 第2調査面の遺構内出土遺物（1）



第48図 第2調査面の遺構内出土遺物（2）



## 第5節 遺物包含層の遺物

### 1 遺物包含層出土遺物の分布について

D地区では縱横に走る溝や建物跡は認識できないが、柱穴が密集する場所が存在する。本節では、遺物包含層中で出土した遺物を器種別にグリッドごとにカウントすることにより、調査区の時期変遷や性格変化を推定する。遺物カウントは、各器種の接合前総破片数を5メートルグリッドで集計した。時期は縄文時代・弥生時代・古代・中世を設定し、それぞれ、縄文土器・石器、弥生土器・須恵器・土師器、灰釉陶器、山茶碗・中国産陶磁器を対象として比較した。木製品は、時期を推定することが困難なため土器の器種とともに集落の性格変化の指標とした。

#### 縄文時代

縄文土器は点数が4点と少なく、散漫な分布となる。石器も北西側の比較的標高の高い場所に分布するが、散漫な分布を示す。縄文時代には当地区を積極的に利用した痕跡を見出せない。

#### 弥生時代

弥生土器は調査区北部に多く分布する。南部では38ラNWグリッドで弥生時代後期の堅穴住居跡1軒を確認している。標高も北西部と比較すると一段高い。調査区の北西側は標高が低くなるため、遺物が地表面や溝等の水流で流れこんだ可能性がある。このことから、弥生時代は調査区の南東側の標高の高い部分に集落が広がっていたことが推定される。

#### 古墳時代及び古代

須恵器は北東部と西部を中心に広がる。古墳時代と推定される須恵器は西部に多い。遺構内出土遺物でも同様の傾向があることから、弥生時代から古墳時代の遺物は西部に広がり、奈良時代以降の遺物は調査区北部に広がる傾向がある。また、調査区北部38E列は出土量が多い。同地区の下層には、南北方向に主軸をもった溝は検出されていないが、溝のような遺構があった可能性も推定される。

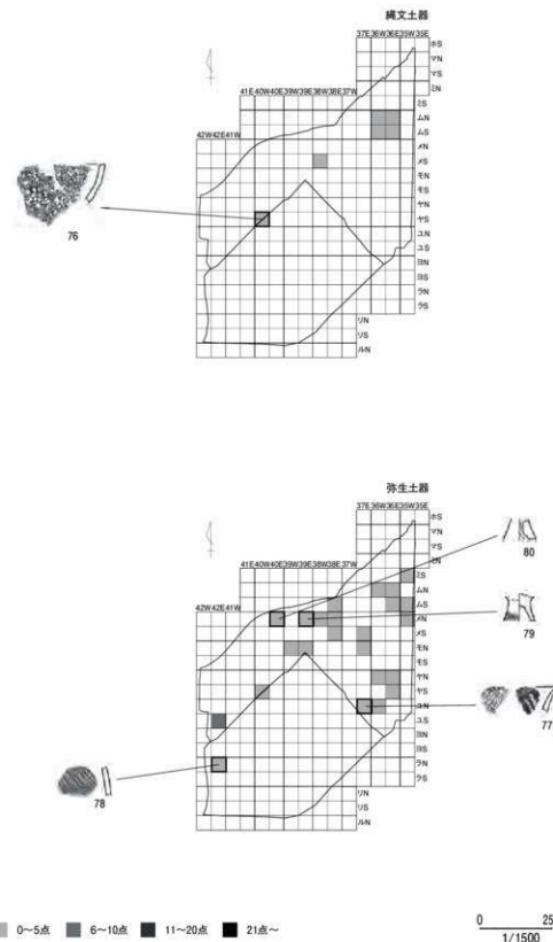
灰釉陶器は調査区北部を中心に広がる。遺構出土遺物でも同様の傾向が認められる。遺物の集中は、南西から北東方向に軸をもつエリア（遺物掲載番号116・119・127）と南北方向に軸をもつエリア（遺物掲載番号120・121・123）に分かれる。南西から北東方向に軸をもつエリアの下層には、南西から北東方向に軸をもつ溝（197SD等）があることからこの溝に帰属する遺物の可能性が高い。南北方向に軸をもつエリア（遺物掲載番号120・121・123）には南北方向に主軸をもった溝は検出されていないが、区画溝のような遺構があつた可能性も推定される。

#### 中世

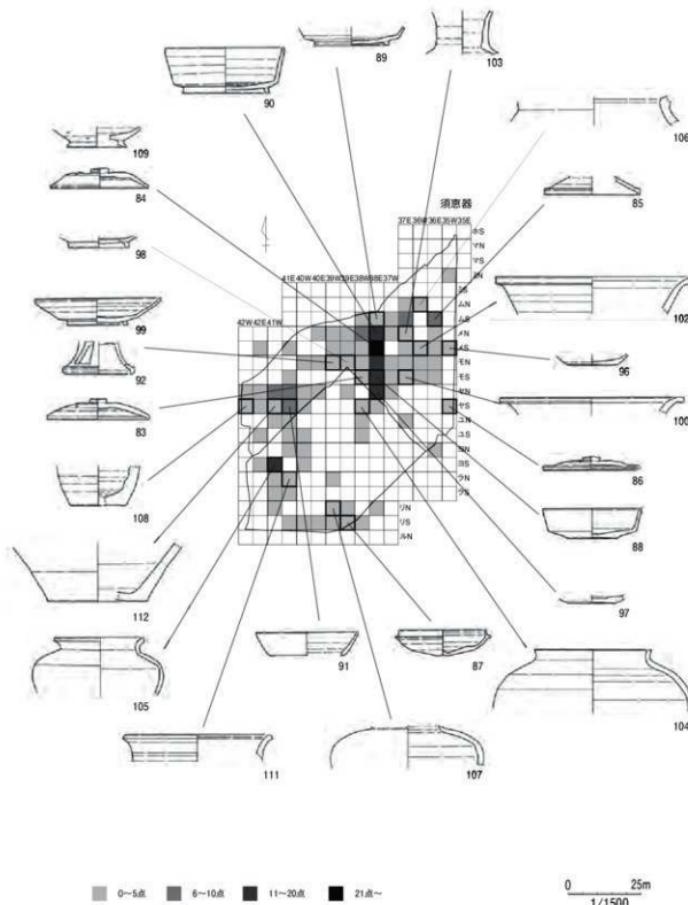
山茶碗は調査区北部を中心に広がる。遺構出土遺物でも同様の傾向が認められる。調査区北部の中箇所は、SH4・5の位置と合致する。このほかは遺物の集中が認められないが、中世陶器や中国産磁器を含めると、前時期と同様に南西から北東方向に軸をもつエリアが認められる。

#### 木製品

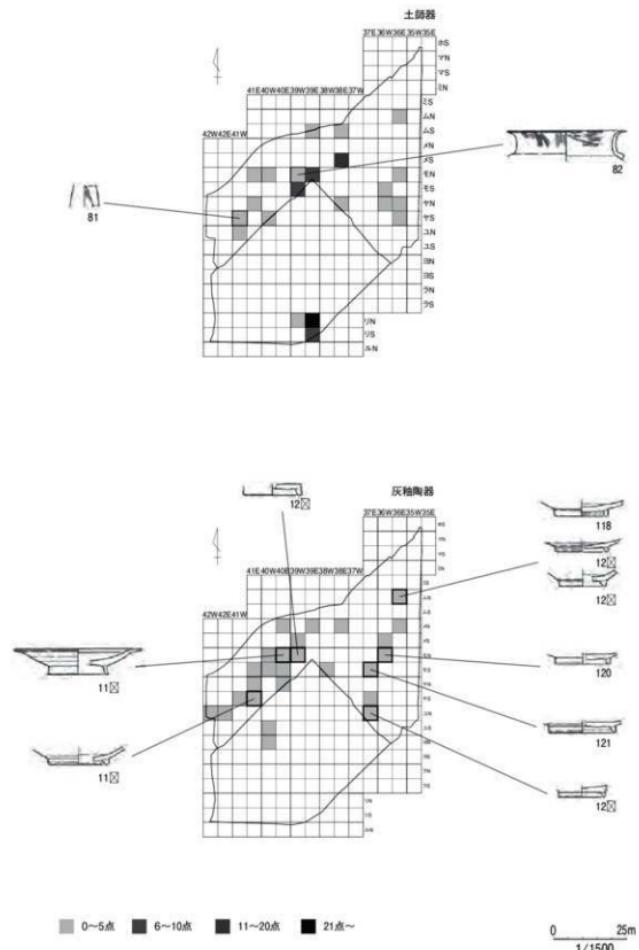
南西から北東方向に軸をもつエリアが認められ、下層には、南西から北東方向に軸をもつ溝（197SD等）があることからこの溝に帰属する遺物の可能性が高い。板材・燃えさしの出土点数が多い。斎串や形代など祭祀性のものではなく、下駄や容器などが出土した。



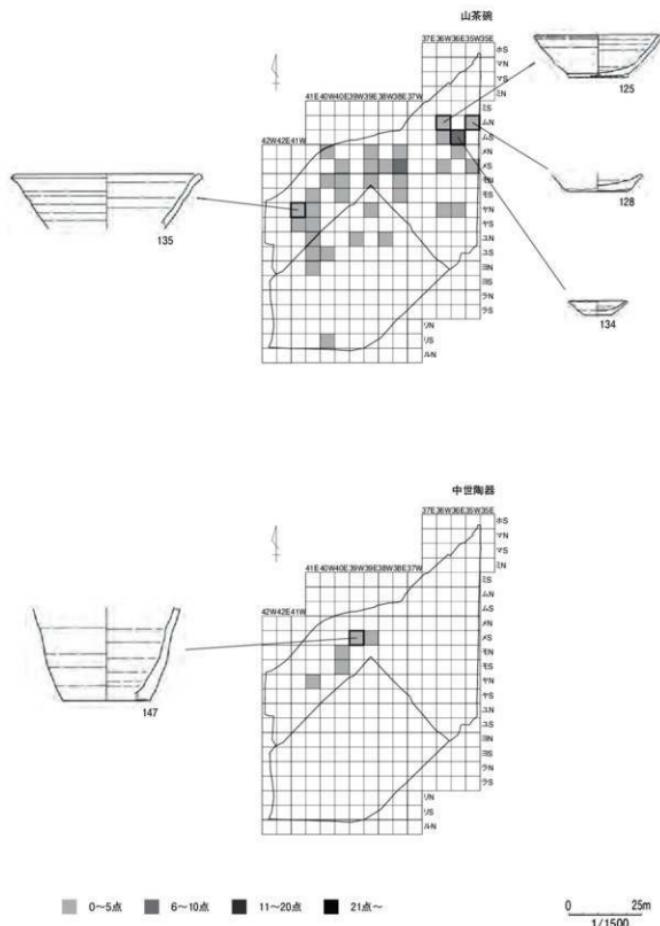
第49図 遺物包含層別の出土状況図（1）



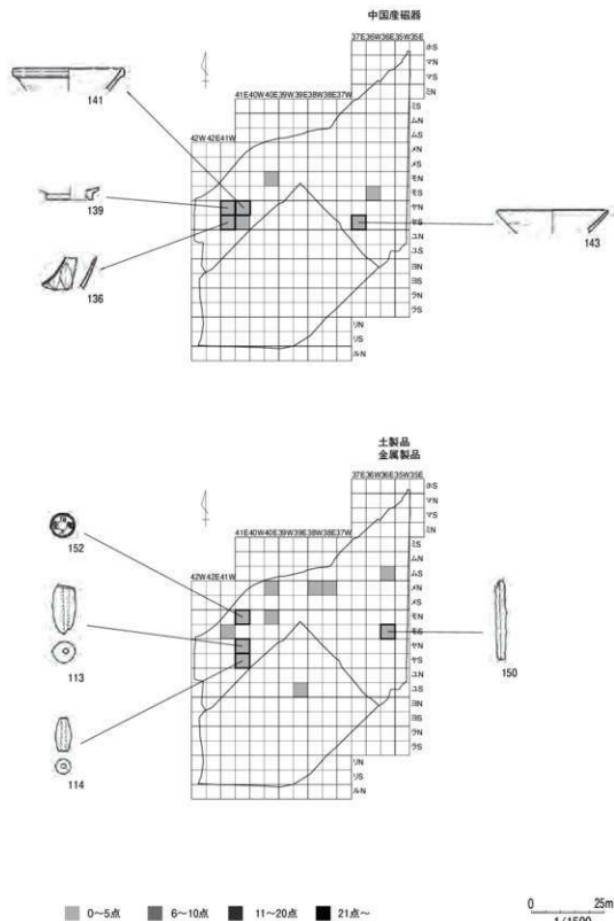
第50図 遺物包含層別の出土状況図（2）



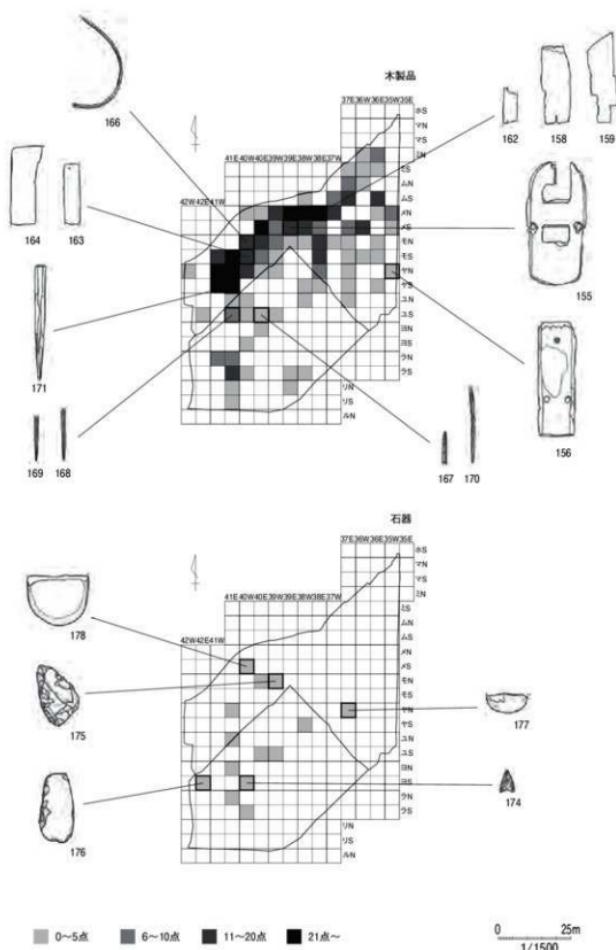
第51図 遺物包含層別の出土状況図（3）



第52図 遺物包含層別の出土状況図（4）



第53図 遺物包含層別の出土状況図（5）



第54図 遺物包含層別の出土状況図（6）

## 2 土器類

### (1) 縄文土器 (第55図-76)

76は深鉢の口縁部で、外面に指円押型文を施す。縄文時代早期のものと考えられる。

### (2) 弥生土器 (第55図-77・78・80)

77は口縁部の内外面に、78は胴部外面に横羽状の文様を施す。弥生中期から後期のものと考えられる。80は器台の脚部である。

### (3) 土器師 (第55図-79・81・82)

79は高杯の脚部で、外面にミガキ調整を施す。81は高杯の脚部上方部分で、内面に2条の絞り込み痕跡が認められる。82は壺の頸部から口縁部で、内面に横方向、外面に縦方向のハケ調整を施す。

### (4) 須恵器 (第55図-83~99・第56図-100~112)

83~86は坏蓋である。いずれも天井部に摘みが付き、蓋の口縁端部が折り返され、内面に返りを持たない。84は8世紀頃のものと思われる。87は杯身で、立ち上がりは短く、内傾する。外面は1/3ほどヘラ削り調整を施す。中村編年のⅡ型式5段階の資料と類似する。92は高杯の脚部で方形の透かし孔が認められる。中村編年のI型式5段階に比定される。68と同様に胎土が緻密で焼成も良好であることや出土地区が同じことから、接合関係はないが、68と同一個体の可能性がある。88は無台杯で底部から体部にかけて直線的に斜めに立ち上がる。89・90・93・94は有台杯、91は底部を欠損しているため有台か無台か不明である。いずれも底部から体部の境部に明確な稜線が認められ、直線的に斜めに立ち上がる。95~97は無台碗である。98是有台碗で、底部に墨書「五山（？）」という文字が認められる。99是有台碗で、底部外面に墨書「二」のような文字が認められる。101・103~107・109は壺である。101・103・106は壺の頭部である。104・105・107は短頭壺である。105は頸部から緩やかな曲線を描きながら丸味を帯びた体部となる。100・102・108・111・112は壺である。100・102は口縁部が外反し、100は端部をやや丸く、102は平坦に調整する。108は内面が回転ナデによる凹凸が顎著にみられる。111は端部を丸く調整する。112は底部から体部にかけて直線的に斜めに立ち上がる。

### (5) 灰釉陶器 (第57図-115~124・126・127・129)

115・117~120・122・123・126・127・129は碗である。115の体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。高台は外面上方に弱い稜を有し、下半が内側しつつ下端が尖る。黒竪90号窯式に比定される。118・119~123・129の高台は外面に弱い稜を有し、下半が内側しつつ下端が尖る。黒竪90号窯式~折戸50号窯式に比定される。126の高台は下半が内側しつつ下端が尖る。129の高台は直立し端部は平坦となる。116は段皿である。高台は外反し下端が尖る。口縁端部は強く外反する。底部内外面に三叉トチンの跡が見られ、内面全体に自然軸が付着する。黒竪90号窯式に比定される。

### (6) 山茶碗 (第57図-125・128・130~135)

125・128・130~132は碗である。125は均質手で粗粒感を残す。高台は低く、高台外側は直立する。高台内側は内傾し、端部が尖る。4型式に比定される。130は均質手で底部が扁平で厚手である。5型式に比定される。132は均質手で130と同様に底部が扁平で厚手となる。高台は低く、下端は平坦となる。5型式に比定される。129は荒肌手で底部が厚手で、5型式に比定される。131は均質手で底部は薄い。8型式に比定される。133・134は均質手の皿である。133は底部内外縁に輪状の窪みをもつ。6型式に比定される。134は底部から若干立ち上がりながら外反する。体部は直線的になり、口縁端



部は僅かに外反する。5型式に比定される。135は片口鉢である。荒肌手で体部が直線的に開き、端部は尖る。5型式に比定される。

#### (7) 中国磁器 (第57図-136~143)

136~138は青磁の碗である。137・138は鎌連弁文が認められ龍泉窯系に分類した。139・140は青磁の碗で底部である。141~143は白磁の碗である。141は口縁部が大玉縁となる。142は器厚が薄く、体部に丸みをもつ。口縁部は外反する。143は外面の白磁釉が口縁部から体部上半にかけて認められる。器厚は薄く、口縁部はやや内擣する。

#### (8) 中世陶器 (第58図-144~148)

144と145は古瀬戸の瓶と短頸壺である。144は内面全体に赤色顔料が付着する。146は珠洲産の甕としたが、美濃須衛産の可能性もある。147は常滑産の甕若しくは瓶である。148は産地不明の甕である。

#### 3 土製品 (第56図-113・114)

113・114は土鍾で、灰釉陶器の胎土と類似する。端部は面取りし、平坦に調整する。

#### 4 銭貨・金属製品 (第58図-149~153)

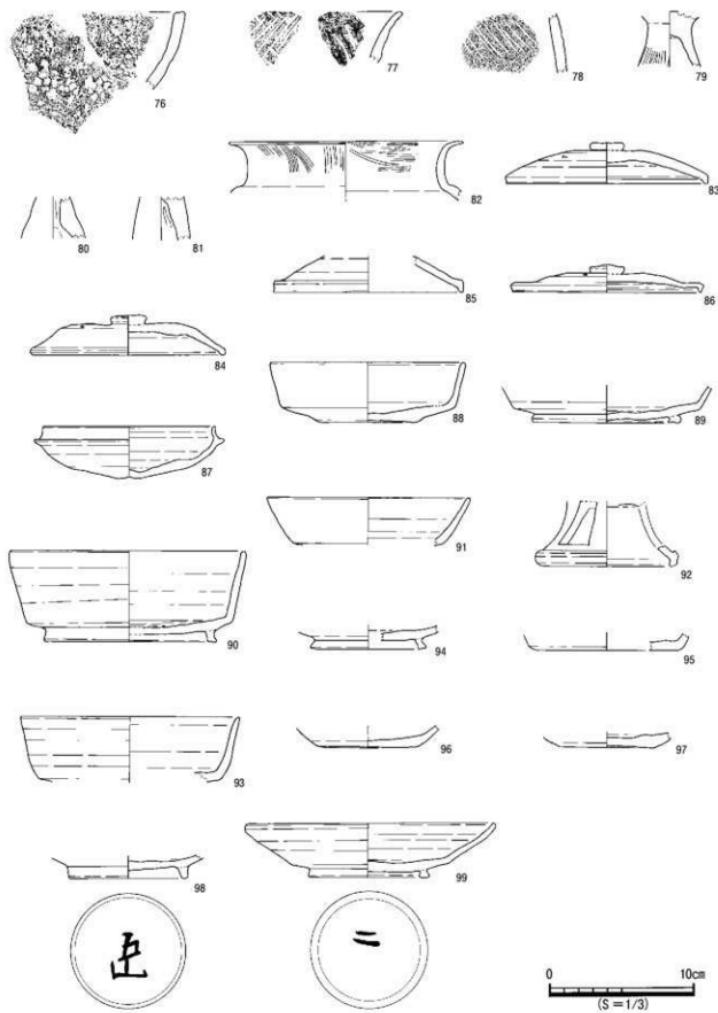
149~151は用途不明の金属製品である。149は両端に環状のものが付けられている。表側に木質の一部が残し、裏側に目釘状の突起があることから、木質の材に取り付けられた可能性がある。カンジキの可能性がある。151は矛のように袋状になり、先端は石突状になる。150は薄い板状のもので長軸に沿って中央に棱をもつ。152・153は北宋銭である。面背に加刀痕跡なく、鋳縮みも見られないことから、本邦模鋳銭の可能性は低い。中世から近世初頭(寛永年間)までに流通した渡米銭と思われる。

#### 5 木製品 (第59図-155~171・第60図-172)

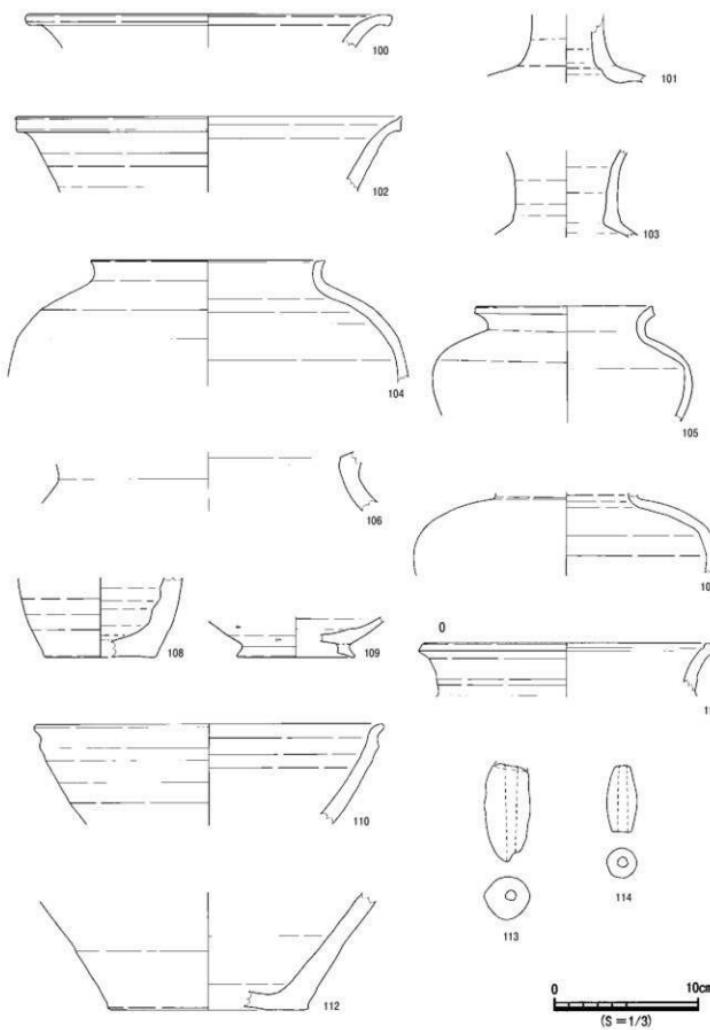
155は差し歎下駄、156は連歎下駄に分類した。157~163・166は容器に分類した。157・160・161は曲げ物の底板と思われる。158・159は曲げ物の側板と思われ、均等に曲げるための小刀で刻まれたケビキ線を密に入れる。164は折敷に分類した。163は穿孔部分に木釘の一部が残存する。165は用途不明品であるが、板状の側辺を弧状に整え、切り込みを入れる。166は167・168・170・171は箸状木製品である。木片を小割りし、先端を尖らせる。169は用途不明品であるが、丸木材の断面を多角形に整え先端を尖らせる。172は柱材で断面を多角形に整える。底面はの加工面2面で形成される。

#### 6 石器類 (第58図-154・第60図-173~178)

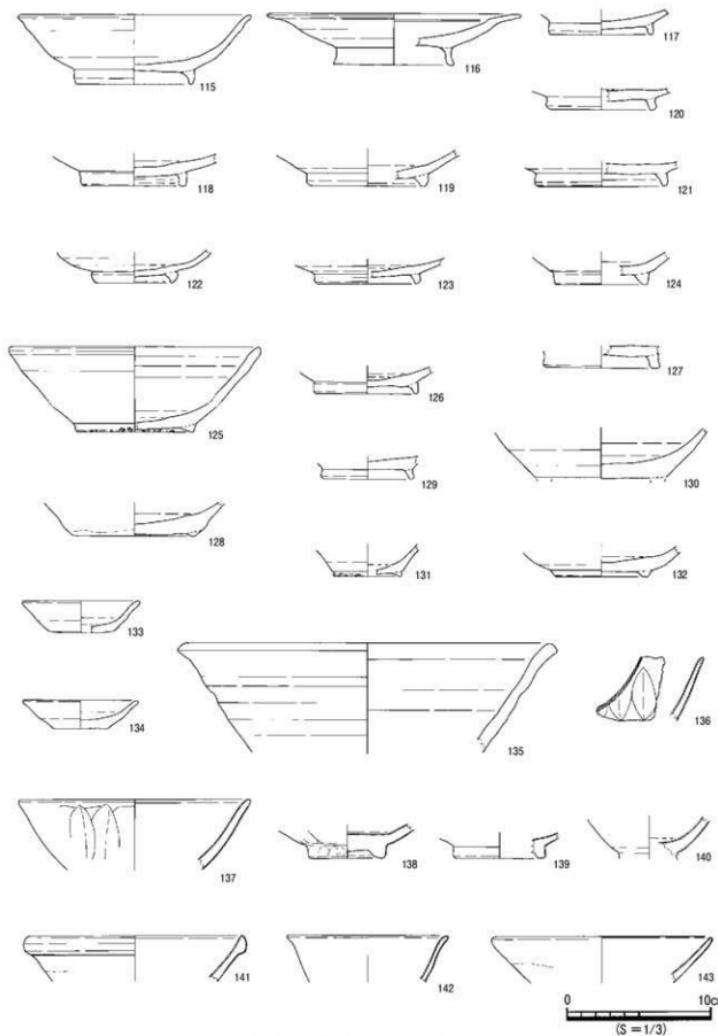
154は手持ちの砥石である。平坦面及び両側面に磨痕・線状痕を残す。173・174は無茎石鎌である。173は横長の剥片を素材とし、表裏面全体に丁寧に調整を行う。基部は折損後、再度浅い弧状に調整する。174は縱長の剥片を素材とし、側面を中心して剥離を施す。基部は脚端部を丸め、「く」字状に浅い抉りを入れている。175はスクレイバーである。縱長剥片を素材とし左側辺を主要剥離面側から曲線的に刃部調整している。176は打製石斧である。背面に原礫面を残す横長の剥片を素材とし、両側縁をほぼ平行に成形する。刃部は曲線的で刃部に直交する線状痕を両面に残す。177は磨製石斧である。脇部を欠損した刃部の破片で、刃部は両刃で曲線的で刃部に直交及び斜行する線状痕を両面に残す。178は磨石である。表裏面及び両側面に磨面を残す。



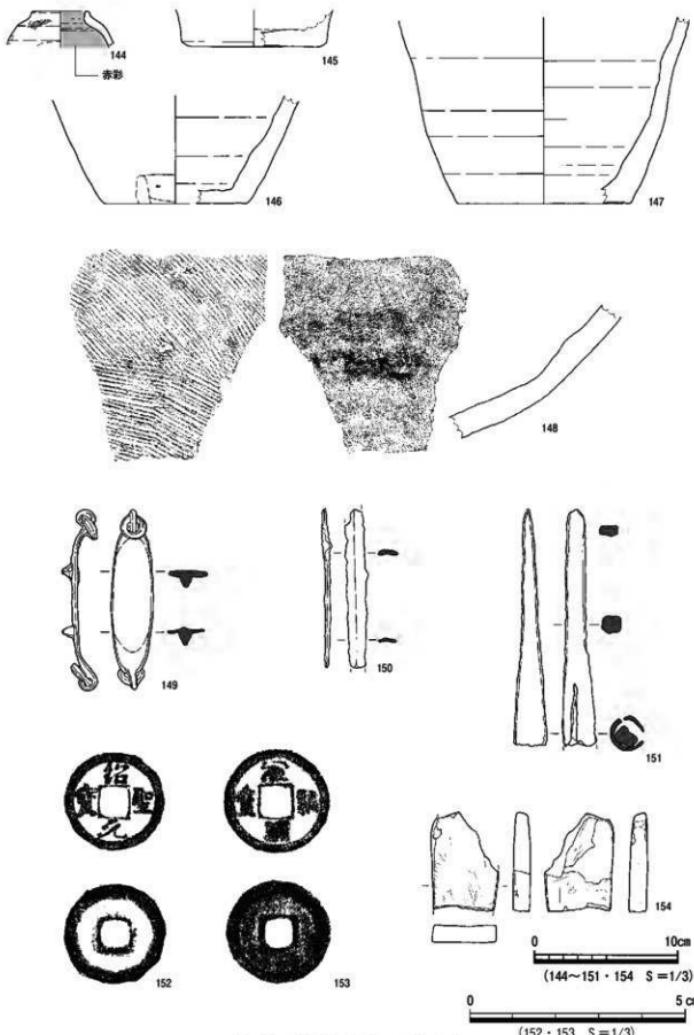
第55図 遺物包含層出土の遺物（1）



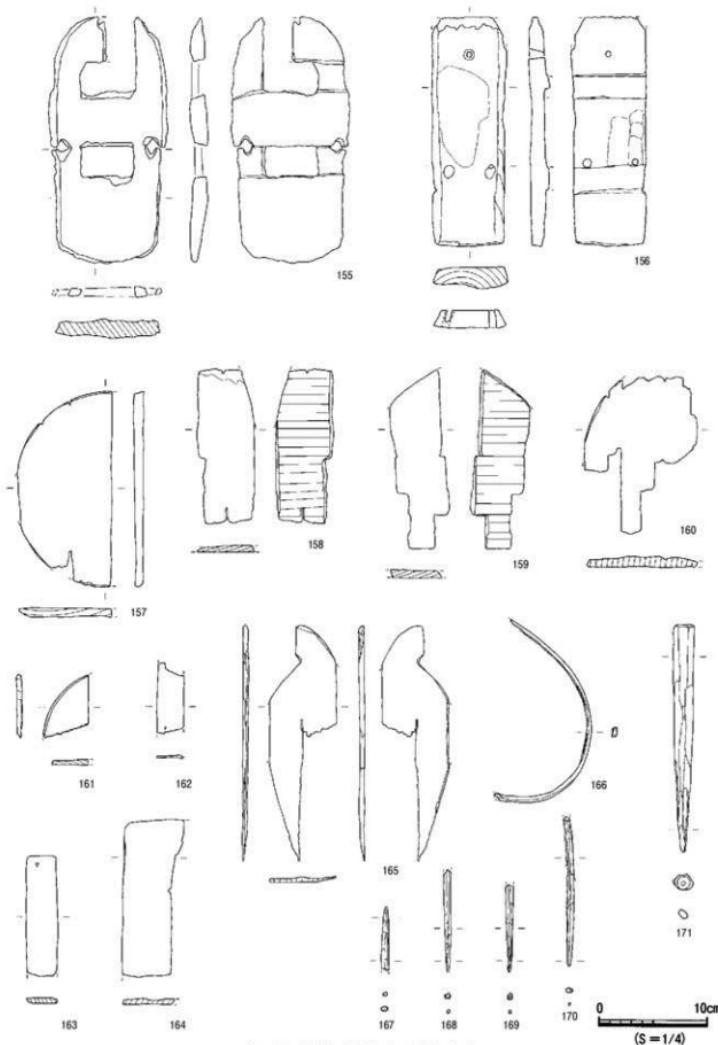
第56図 遺物包含層出土の遺物（2）



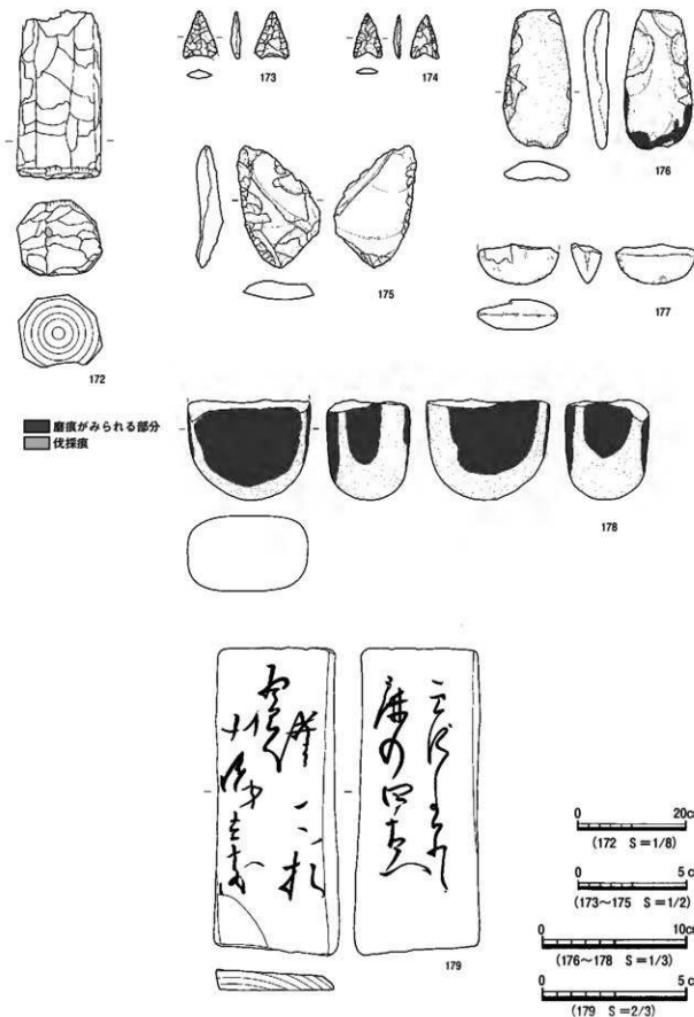
第57図 遺物包含層出土の遺物（3）



第58図 遺物包含層出土の遺物 (4)



第59図 遺物包含層出土の遺物（5）



第60図 遺物包含層出土の遺物（4）